報徳のおしえ
Q&A

報徳のおしえＱ＆Ａ増刷発刊にあたり

豊頃町小・中学校連携教育推進会議では、町内児童生徒に対する指導の継続性や接続の円滑化を図る学習指導や生徒指導、学校運営などについて望ましい在り方を実践研究し、報徳の町の子ども達が目標を持って夢に挑戦する教育推進に資するため、「報徳のおしえ」を基盤とする小・中学校相互の連携教育の推進を目指しています。

また、この取り組みは、学校教育の範疇で完結するものではなく、保護者、各地域住民のご理解はもちろん、町が設置している、生涯学習の町づくり推進本部が推進する「報徳のおしえを基盤とする生涯学習推進」の一環として位置づけすすめられています。

具体的には、町教育研究所の研究活動とも連携し「先進地に学ぶ事例研修」、「小・中学校間の連携・交流授業実施」、「町民を対象とした研修機会の提供」などに取り組んでいますが、更に、報徳のおしえに関する学習資料、指導資料作成についても重要な活動に位置づけ取り組む必要があります。

そこで、この度前豊頃町生涯学習推進アドバイザーとしてご活躍された笠松信一氏が、永年の研究の成果をまとめられた本誌を、本町報徳教育の指導書として活用させていただきたく増刷発行させていただくことといたしました。

この度の増刷に対し、ご快諾下さった笠松氏に深く感謝いたしますとともに、本誌の活用により本町の「報徳のおしえを基盤とした小・中学校連携教育」が更に推進することを確信して発刊のことばとします。

平成２０年３月

豊頃町小・中学校連携教育推進会議

報徳のおしえQ＆A

○　はじめに

一、　にんげん「二宮金治郎」の生いたちと業積

Q1　金治郎は　幼少の頃どのように育ったか …… 1
Q2　金治郎は　自立をめざしどのように勉強したか …… 3
Q3　金治郎は　二宮家の再興をどのようにはたしたか …… 4
Q4　金治郎は　武家の財政立て直しにどう取り組んだか …… 5
Q5　武士になった金治郎の『桜町財政再建』は　スムーズに進んだか …… 6
Q6　天保のききんを　金次郎はどのようにのりこえたか …… 7
Q7　幕府役人「尊徳」は　どのような仕事をしたか …… 8
Q8　二宮尊徳の「仕法」とは何か …… 9
Q9　金治郎の少年期に生み出した「積小為大」とは …… 10
Q10　断食修行から生み出した「一円融合」とは …… 11
Q11　民主的手法　「芋こじ」　つてなあに …… 12
Q12　世界最初につくった 信用組合「五常講」とは …… 13
Q13　「冥加金」とは　何か …… 14
Q14　晩年の尊徳は　どのような仕事をしたか …… 14
Q15　「報徳仕法」のひろがりは …… 16
Q16　二宮金治郎のおいたちを　略年表で見ると …… 17
Q17　二宮尊行・尊親　を　略年表で見ると …… 19

二、『きんじろう』と『尊徳』の裏話

Q1　名前は「金次郎」か「金治郎」か …… 21
Q2　戦後、なぜ「金治郎像」が消えていったか …… 22
Q3　これからの社会で「金治郎像」に何を期待するか …… 23
Q4　金治郎のかついだ「柴」はどこから　どこへ …… 24
Q5　なぜ。柴を運んだか・・・「柴」のお値段は …… 24
Q6　金治郎は　なぜ『林蔵』と呼ばれたか …… 26
Q7　どう、「積小為大」ということばを生み出したか …… 26
Q8　尊徳像を、なぜ「鶏鳴回村像」と言うか …… 27
Q9　農民を救った　「秋ナスの味」とは …… 28
Q10　なぜ、三はいで一俵の「斗枡」をつくらせたか …… 29
Q11　金治郎考案の　金融モデル五常講とは …… 29
Q12　財政再建の決め手に なぜ「分度」に着目したか …… 30

三、「報徳のおしえ」とは

Q1　『報徳訓』を　やさしくすると …… 33
Q2　「至誠」つてなあに …… 34
Q3　「勤労」ってなあに …… 35
Q4　「分度」ってなあに …… 36
Q5　「推譲」つてなあに …… 37
Q6　「積小為大」とは …… 38
Q7　「一円融合」とは …… 38
Q8　「以徳報徳」つて　どういうこと …… 39

四　二宮尊親の北海道（豊頃開拓）

Q1　尊徳のまご　尊親の北海道移住の理由は …… 41
Q2　尊親はどのように　土地を見つけたか …… 41
Q3　尊親の二宮開拓は　どのように …… 42
Q4　興復社の開墾と経営は　どのように行われたか …… 43
Q5　興復社　牛首別農場の農作物の変遷は …… 44
Q6　興復社の人々のくらしは　どのように …… 45
Q7　牛首別報徳会とは　どのような活動をしたか …… 46
Q8　心田開発と地域の創造はどのようになされたか …… 47
Q9　自治による村づくりは　どのように進められたか …… 49
Q10　「依田勉三」・「関　寛斉」との交流は …… 51

五　報徳のおしえを　学ぶガイド

Q1　「報徳」研究のねらいは …… 53
Q2　「報徳」の　今に通じるところは …… 53
Q3　「報徳のおしえ」から　今の世に送るメッセージは …… 55
Q4　尊徳の「心田の開発」とは …… 57
Q5　二宮尊徳ゆかりの地とは …… 58
Q6　いま受け継がれている「報徳サミット」とは …… 59

六　生涯学習部会研究のまとめ

①　研究主題　②　研究動機　③　研究計画　④　研究方法 …… 61
⑤　リーフレット作成のもとになる考え方　⑥　リーフレット …… 63
⑦　報徳に関するアンケート調査 …… 67
⑧　報徳の授業研究 …… 70
⑨　道徳指導資料 …… 77

七　二宮尊徳ゆかりの地を訪ねて

・「小田原」から「今市」まで …… 85

編集を終えて …… 94

一．にんげん「金治郎」の生いたちと業績

Ｑ１　金治郎は 幼少の頃どのように育ったか？

A

神奈川県の小田原市は、昔城下町として知られているが、その北部に栢山という地域がある。

この一帯は富士山ろくに源をもつ酒匂川によって作られた足柄平野の中心部で、豊かな農村地帯であったが今は住宅地に変わっている。

今から２２０年前の天明７年（１７８７）、二宮金治郎はこの栢山で生まれた。金治郎の父利右衛門は「栢山の善人」と呼ばれ二町三反（２．３ヘクタール）の地主で、何に不自由のない平和な毎日の明け暮れであった。

しかし、金治郎の生まれた天明７年は、幕府の政治にも暗い陰がさしかかった年であった。このころ、各地に飢饉や天災がうち続き、それにつれて百姓一揆（農民が税金の引き下げなどをもとめて騒動をおこすこと）や打ちこわし（都市の生活に苦しむ人々が米屋や金持ちをおそって略奪する騒動）が起こった。金治郎一家の生活への不安は、早くも彼が生まれて四年後に始まった。

寛政３年（１７９１）８月、関東地方に大暴風雨が襲った。朝から降り続いた雨は夕方から大嵐となり、夜になってますますはげしく、ついに酒匂川の堤防がいたるところで切れて水が奔流し、栢山の被害は大きく利右衛門の土地はほとんど砂礫の下に埋まってしまった。父利右衛門は埋まった田畑を元どうりにするために懸命に働いた。水害で収穫が全く無いなかで殿様に治める年貢米（税金）はそれほど減らせてもらえず、貧乏のどん底に落とされていった。

金治郎の生まれた家

こうしたなかで、利右衛門は心労から病床に倒れ、十歳を越した金治郎は、父に代わって酒匂川の堤防工

事に出たが、働く人たちのあしでまといとなった。こうした金治郎の手助けもむなしく父利右衛門は亡くなった。

父が死んでからは、金治郎は母を助けるため朝早くから懸命に野良仕事を手伝い、夜は遅くまで縄をなった。富士山が雪化粧をし、箱根連山から冷たい北西風が吹く頃になると薪取りが始まる。箱根山の中腹にある栢山村の入会山（共有林）へ４キロの道のりを毎日のように重たい薪を背負って家に運んだり、小田原の町へ売りにもでかけた。しかし、彼の懸命の努力にもかかわらず家運は傾く一方で、母も過労のため３６才で死んでしまった。

この年またも酒匂川が氾濫し、わずかに残っていた土地も再び土砂に埋もれてしまった。親を失い土地を失った兄弟は途方に暮れて、昼夜泣き明かした。そこで親戚が集まり相談の結果、弟二人は母の実家に引き取られ、金治郎は隣の叔父万兵衛の家に身を寄せることになった。金治郎はこのとき１６才になっていた。

こうして金治郎の家が破産したのは、働き手の父母をあいついで失ったという不幸の外、二町もの土地をもっていても一度や二度の水害で家を持ちこたえることのできない、当時の政治のしくみがあったからである。徳川の封建制のもとでは、農民にとって年貢（租税）は非常に重かった。四公六民といい、五公五民といい、六公四民といい、収穫の半分前後が年貢である。この他にもいろいろな負担があった。そして、たとえ天災のため不作が続いて収穫が減っても、年貢の減免は思うようにはいかない。そのため、やむを得ず借金をするようになり、やがて土地を人手に渡し没落の道をたどっていくことになる。

Ｑ２　金治郎は 自立をめざしどのように勉強したか？

A

金治郎は１６才から１８才まで、伯父万兵衛の家で過ごした。

伯父は、金治郎を立派な百姓にして一家の再興をはからせようと厳しくきたえた。

しかし、金治郎は幼少期から読書が好きで、家にあった童子教・実語教といった書物を父から学んだ。まわりの山々を見ながら「山高きがゆえに貴からず、樹あるをもって貴しとなす」（実語教）と声を張り上げてその意味をかみしめた日もあった。

また、柴を担いだ入会山の往復の道すがら、大きな声で暗唱したのは「大学」という儒教の難しい書物の一節だったと伝えられている。

油がもったいないと怒鳴られた

あるとき、金治郎が夜遅くまで本を読んでいるのを見つけ、「百姓に文字はいらぬ」「油代がもったいない！」と怒鳴った。こうした万兵衛の叱責によっても金次郎の向学心はくじけなかった。彼は伯父に迷惑をかけない方法をと考え、燈油の原料である菜種の栽培を思いついた。

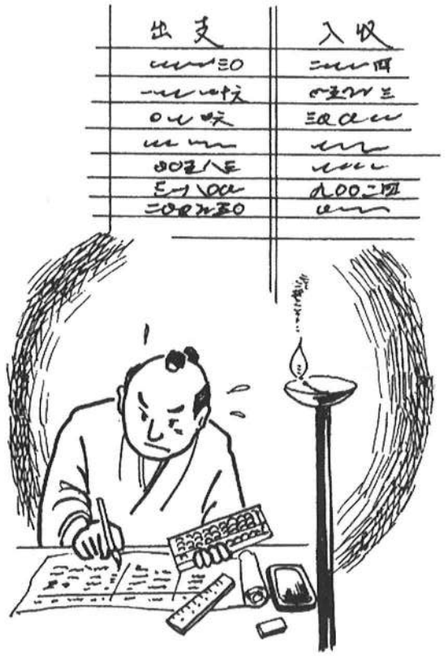
友人から菜種５勺（０．５リットル）を借りて、近くの荒地に撒いた。それが翌年になって７升（１２．６リットル）以上の収穫となった。また、この年道端で拾った稲の苗をもったいないと思い、荒田の水たまりに植えておいたところ、秋には一俵（６０キロ）の米がとれた。わずかな種やひとにぎりの苗が、やがて予想外の収穫となる、小さいなことの積み重ねが大きなことに発展するという「積小為大」という考えに至っている。

この「積小為大」が金治郎の座右の銘となり、二宮家の再興に結びついたと言われている。

Ｑ３　金治郎は 二宮家の再興をどのように果たしたか？

A

１９才になった金治郎は、伯父万兵衛の元を離れ３年ぶりに無住の我が家の再興に戻った。くもの巣を払い、壁のくずれを直し一人住まいが始まる。



金治郎は、毎日日記をつけ生活のもとになる金銭の出入りを克明に記録したり、学問を深めていく過程で身に付けた合理主義（ものごとをすじみちやみとおしを立てて考えていく考え方）を貫く人であった。

・・・ただ馬車馬のように自分の土地を開墾するだけの普通の百姓の働きだけでは、家の再興は到底無理と判断、荒れたままの田や畑に鍬を入れ、その合間には、村内の家々にやとわれて働き賃稼ぎをした。彼は懸命に働き人も嫌う荒地の開墾には力を尽くした。だが、開墾ができてしまうと、それを耕すことはせず、それを人に任せて、自分は薪や米を小田原の城下町まで売りに出たり、また、米や金を他人に貸し付けて利子を得たり、武家に奉公して給金を得ることに力を尽くした。

このころ、全国的に武士の学問が奨励され、各藩では私塾を普及したり、藩校を作ったりした。学問好きの金治郎は、１８・１９才のころ小田原の武家屋敷に出稼ぎに出かけ、家の外から好んで講義を聞いた。２６才になった金治郎は、小田原藩の家老である服部家に住み込んだ。ここで、夜読書する三人の男子のそばにすわって離れず、昼は学校にお供をして、教室の窓下に立ってひそかに先生の講義を聞いたという。こうして学問と蓄財を両立させながら、着実に、しかもかなりのスピードで一家復興を果たしていった。２４才には一町五反（１．５ヘクタール）近くの地主となった。文化１４年（１８１７）、金治郎３１才になり、妻を迎えて一家の独立をなしとげた。父の残した財産を上回る三町八反（３．８ヘクタール）を所有する一流の農家になった。

Ｑ４　金治郎は、武家の財政立て直しにどう取り組んだか？

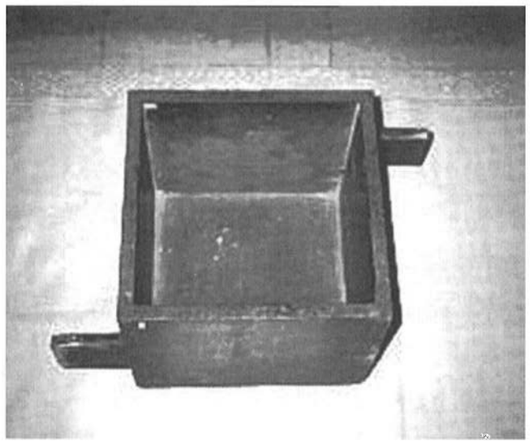
A

当時、小田原藩に家老職をつとめた服部十郎兵衛という人がいた。家老といえば、大名に仕える家臣として最高の地位にある武士であるが、非常に生活は苦しかった。

それは、服部家が藩から受ける一年分の給料は、表向き千二百俵の米であるが、実際には四百三俵しかもらえず、そのうえ二百五十両の借金をかかえていた。こうした状況の中、武家屋敷に奉公をしながら一家の再興を果したり、周辺の人々の借金の返済などの相談にのったり、周辺の人々の信頼を得ていた。金治郎に、服部家の財政の立て直しを依頼されたのも当然のなりゆきであったと言えよう。

まず、金治郎は服部家の帳簿一切を調べて、収入と支出の実際を細かく分析した。その結果約束の五年間、支出を大幅に減らし出た余裕を借金の返済に当てるため**「食は必ず飯と汁に限り、衣は必ず綿布に限るべし、必ず無用の事を好むべからず」**ということを主人をはじめ奉公人に至るまで誓わした。この頃、金治郎は窮乏する藩士の救済のために「５常講」を考えだした。５常講というのは、節約したお金をみんなで積み立てておき、困った人が出ると、これを貸してやるという方法で、今日の信用組合と同じような制度である。５常というのは、**「仁、義、礼、智、信」**の５つの徳の事である。

また、金次郎は長年の課題（父利右衛門の頃から農民を苦しめていた年貢米を計る不統一であった升）斗升の改正にも取り組み農民を喜ばせた。



二宮通尚さん所有
小田原市寄託（尊徳記念館所蔵）

Ｑ５　武士になった金治郎の「桜町財政再建」は、スムーズに進んだか？

A　小田原藩主大久保忠真公は、指導力があり経済に明るい金治郎を百姓から武家に取り立てて、藩の財政建て直しをやらせようと考え桜町（栃木県二宮町）の復興計画を承認させた。

文化６年（１８０９）金治郎３７歳の時、田畑家財をすべて売却清算し親子三人で桜町に移住した。

翌朝から、金治郎は４時に起き、夜は８時まで一軒一軒を訪ねて回った。

（鶏鳴廻村）村民の働きぶりや暮らしむきを詳しく調べると共に仕事を怠けている者に厳しく注意し、勤勉に立ち働くものには褒美を与えた。また、村民に投票を行わせて行いのよい者や、働き者を選び出してこれを表彰した。

こうしたやり方で、百姓に働く喜びや意欲を高め、本来の目的とする荒地の回復と財政再建にとりかかろうとした。在来の農民を大切にすると共に、農家の二・三男や他村から入植させた百姓（入百姓）を厚く保護した。

ところが、長年の悪風にしみた村民や役人たちの中には、こうした変化を喜ばない者もいた。特に六年目に上役として小田原から赴任してきた豊田正作はことごとく金治郎の奮闘に反対し、妨害や圧迫を繰り返した。金治郎にとって、桜町仕法の成果が着々と現われつつあった時期でもあったので、それ以来一向に事業が進展しない状況は大きなショックであった。

・・・挫折感に苦しむ金治郎は、とうとう三カ月間ほど行方をくらます旅に出、千葉県の成田山不動尊に篭り断食修行を行うこととなった。

農民出身の指導者（武士～地方公務員）になった金治郎への反発をどう取り除くか？自分の前に立ちはだかかった桜町での大きな障害を、どう乗り越えるかいろいろと悩み、断食をしたり神や仏にも祈るさまよえる旅であった。

・・・２１日間の断食と瞑想を終えた金治郎の胸には、すでに苦しみは取り除かれ悟りがあった。それは、「一円融合」・・・「人には絶対の善人、悪人というのはないのだから、誠意をつくせば、人の心を動かすことができるはずだ」だから、「不動明王」のごとくたとえに火がもえていても決して桜町から動くまいという固い悟り（決意）を開いたのである。

また、彼が三カ月にわたり姿を消している間に、桜町の様子も変わっていた。金治郎の支持者たちは、彼の行き先を探す一方で、次々に江戸に出て小田原藩の役所へ桜町仕法（復興事業）の継続を嘆願するようになっていた。

その後は、桜町にもどった金治郎の仕法（新田開発等）は、多くの人々の理解と協力により、順調に進み着々と成果を上げていった。

天保２年（１８３１）、約束の十年の満期を迎えた。桜町領は、この間農家戸数、人口も増え、荒地は減り、用水路や道路もよくなり、農家の収入も増し、また人心も改まってきた。年貢米は千八百九十四俵となり、文政４年の千五俵に比べ倍増し桜町領の再建は成功した。

Ｑ６　天保のききんを、金治郎はどのように乗り越えたか？

A　天保のききんの時に、次のような金治郎の逸話が残っている。

天保４年（１８３３）の夏のはじめ、幾日も雨がふり続いた。
そのころ宇都宮の農家でご馳走になった茄子が、いつもと味が違って、ちょうど晩秋の茄子のようだった。おどろいて、その家を飛び出した彼は、田の稲や道端の草を注意深く調べた。どれも葉の先が弱っている。これはただ事ではない。土の中は夏だが、地上にはもう秋がきている。

金治郎は、早速農民たちに「今年は凶作になる。畑一反にききんに強い稗を撒きなさい。そのかわり畑一反分の年貢は出さなくてよい」と命じた。

百姓達は、いくらえらい金治郎でもその年の豊凶などわからないと思ったが，金治郎を信頼し従った。ところが、金治郎の予想は当たった。関東や奥州一帯は雨の多い冷夏となり、結局凶作となって飢えに苦しむ人々が多く出たが，桜町領だけは稗のおかげでだれも飢えるものはいなかった。

日ごろから研ぎ澄まされた感覚を持って自然と接し、毎年天候と作柄の記録を続けている金治郎には推測されることであった。しかし、金治郎はもっとひどい凶作がくると考え、領内に雑穀を多くつくらせ、貯蔵させておいた。

尊徳の予想は的中、天保７年（１８３６）、全国的に天候不順で大凶作となり、翌８年にかけて各地に多くの餓死者が出、また百姓一揆や打ちこわしが起こった。（有名な大塩平八郎の乱は天保８年２月）

金治郎の活躍（天保のききんで、桜町領の餓死者を全く出さなかった）を聞きつけた小田原藩主　大久保忠真は金治郎に小田原藩領内の救済を命じた。しかし、金治郎の最も理解者である大久保忠真の死後、再び金治郎批判が渦巻いた。それは、一介の農民を藩政の一端に参画させたことへの反発、また、金治郎の仕法を**「上を制して下を厚くする」**ものだと警戒する空気が小田原仕法を中途半端なものにしてしまった。

また、天保年間、金治郎の仕法は桜町領の狭い枠をこえて旗本領の青木村や下館藩（茨城県）など関東を舞台に、独特な農村立て直しに取り組んだ。

Ｑ７　幕府役人となった「尊徳」の仕事ぶりは？

A

天保１３年（１８４２）、金治郎が５６歳のとき江戸幕府の老中水野越前守忠那から突然、勘定奉行所（幕府の財政をあずかる重要な役所）に出頭するよう呼び出され、幕府の直臣（御普請役格）にとりたてるという命が下った。このとき、「尊徳」という名を与えられ、今でいう国家公務員となった金治郎に与えられた最初の仕事は、利根川分水路（千葉県印旛沼）の調査であった。

尊徳の現地調査に基づく分水工事仕法案は、「非常な難工事であるから、まず周辺の貧しい村々を復興しなければならない。分水工事を実施するためには、その通路となる村々の人の心をつかんでおく必要がある。１４万両の金を任せてもらえば、窮乏にあえぐ村民を救い、その後村の立て直しを図る。そうすれば、工事が何十年かかろうと、年々の財源を無限に生み出していくことができる。という農民の立場にたった独特なものであった。

二　宮　尊　徳

しかし、この意見は農村の実態を無視し、性急な工事をのぞんでいた幕府側のとりあげるところとはならなかった。

弘化元年（１８４４）、尊徳の最後の仕事として、ついに日光仕法の命が下った。尊徳は２年余りを費やして仕法ひな形８４巻を完成し幕府に提出していたが、実際の日光仕法は、嘉永６年（１８５３）に着手された。

当時の尊徳は高齢であり息子の尊行を同行して７４村を廻村、指導したが病弱になったため、以後は息子尊行や富田高慶らの門人により引き継がれ予想以上の成果を上げた。

Ｑ８　二宮尊徳の「仕法」とは何か？

A

このような、金治郎の考え方にもとづく地域立て直しの事業を「仕法」とよんでいる。仕法には、一家の借財整理もあれば、一村の復興もあり、藩全体の経済の立て直しもあった。なお、仕法のほかに「報徳仕法」とも「趣法」とも「仕方」とも言うことがある。桜町仕法の成功がきっかけとなり、天保年間、金治郎の仕法は桜町領の狭い枠を越えて全国に広まり、東郷村をはじめ鳥山藩、下館藩の建て直しをつづけながら最後に相馬藩の再建に乗り出した。

弘化元年（１８４４）、晩年の尊徳は、日光御神領の荒地復興計画をたてよという命を受けた。 幕府は直ちに見込み書の提出を命じたが、尊徳は現地を見ずにすぐにはできかねると断った。なぜなら、尊徳の仕法書は現地を何度も調査し、現地の人々の暮らしぶりや現状を踏まえ、どのように取り組めば成功するのか、見通しをもった計画書でなければ成功しないということを知っていたからである。

・・・しかし、尊徳の主張に反し、幕府の命令は変わらなかった。

このころの尊徳は、７０歳に近づき体の衰えを感じていたから、自分の手を離れ誰にでも実施できる仕法のひな型をつくることを考えた。・・・長男の弥太郎（尊行）と多くの門弟が協力し２年３カ月をかけ仕法ひな型８４冊が完成した。これは、これまでの尊徳の体験の集約から生み出された、後世に伝える仕法の基準書であったので彼には大事業であった。このころ、６７歳の尊徳は病気にかかっていた。

それでも、少しでも病状がよければ、日光にやってきて廻村を続けた。真夏の太陽が照りつけ、草いきれで息苦しく、ふみつける土は熱灰のようでもあった。それでも歩かねば地域の実情がわからないといって駕籠（かご）にも乗らず足を運んだ。・・・とうとう無理がたたって病気が再発し寝込んでしまった。しかし、桜町の時とは異なり息子や多くの門弟がおり、仕法のひな形もあり事業は着実に進行した。

死を迎えるにあたり、尊徳は弟子達に「決して、ことを急ぐな、決してあきるな」と諭し、最後に「予を葬（ほうむ）るに分を越えることなかれ、墓石を立つることなかれ、只その傍らに松か杉を一本植えおけばそれにてよろし。」と遺言、７０歳でこの世を去った。

Ｑ９　金治郎の少年期に生み出した、「積小為大」とは？

A

「小さなことでもたゆまず継続し積み上げていけば、必ず大きな結果が報いられる。」という考え方である。この言葉は、二宮金治郎の貧しく苦悩に満ちた少年時代の生活から生み出された。

金治郎は１５歳で両親を亡くして一家離散、その後は伯父の家に引き取られることとなる。こうした逆境の中、金治郎は新しい目標を立てた。

それは学問である。土地を失った農民は何によって身を立てるか？学問よりほかにないと考えた。日中の仕事が済むと金治郎の読書が始まった。

小田原市立報徳小学校学習田

しかし、伯父は「農民には学問はいらん！」と言い、羽織を行灯（あんどん）にかけ光をもれないようにして学問に励む金治郎に、「油がもったいない！」としかりつけた。

そこで金治郎は、友人から一握りの菜種を借りて川辺の空き地に蒔いた。翌年菜種は７升以上の実りをみせ、約１升の油を手に入れた。また、初夏のころ道端に捨てられていた稲苗を荒れ田の水たまりに植えておいたところ、秋には１俵（６０キログラム）におよぶ米が収穫された。今も、この捨て苗の地が、小田原市立報徳小学校学習田として残され、子どもたちの体験学習の場となっている。

金治郎は、自然の素晴らしさを知るとともに、「小さな努力の積み重ねが大切」（積小為大）という考えを学んだ。こうした若い頃の経験の中から得た原理が、後の金治郎の生き方やその後の尊徳の業績に結びついていったと考えられる。

Ｑ１０　断食修行から生み出した、「一円融合」とは？

A

世の中は、善悪・貧富・男女・強弱・遠近・賃借など、対立あるいは対称となっているものがいっぱいある。尊徳はこれをみんな一つの円の中に入れ、それぞれの「徳」が「一円融合」することにより、世の中が生々発展すると悟った。自分の立場だけから、一方的に観るのではなく、対立するものを一つとして観る。人は自分の好きな方に偏る性格を持っている。もともと一円のものにも己という境を立てて観るため、円は二つに分かれ己は一方に固執してしまうものである。

もともと農民であった尊徳は、武士となって桜町仕法を推進する時、多くの抵抗と反発に合う事になった。

尊徳は成田山で断食修行をし悟りを開くまでは、自分が絶対に正しいと信じて、仕法を妨害する人は悪人であって憎い人だと思っていた。

ところが、「一円観」を悟ってみると、そうではないことがわかった。反対者には反対者の理由もあるし、そういう反対がでる事は、まだ自分の誠意が足りなくて、反対されてしまうのだと悟ったのである。

「天地の　和して一輪　福寿草　咲けやこの花　幾代ふるとも」

また、「一円融合」は、自然界に例をとつても言える真理である。

この尊徳の道歌は、一粒の草の種が地に落ちて芽が出、種子自身の持つ生命力と太陽、空気、水土との限りない天地の恵みが一円融合し、福寿草という美しい花を咲かせるという真理にもとづくものである。

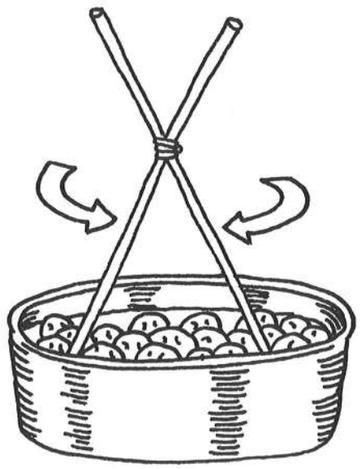
尊徳は身分差別のきびしい対立の激しい封建社会を、この一円観の立場から説き、すべての人間が幸福に暮らせる社会の立て直しを主張した。上に立つ領主と、下に従う領民の間にも、その利害損失が一方にかたよることを認めず、領主には「民は国の大本である」こと、人間としてみな徳を持った尊い存在であること、従って年貢の搾取、重税の取り立てをやめ、領民に大きく譲る仁政を説き、領民には自己の尊い人間性にめざめ、自主的、計画的に勤労し、無気力な生活から立ち直り、分度～推譲によって貧苦から脱し、領主領民相和して両方とも栄えて両全の道を強く訴えた。

また、尊徳は当時の男尊女卑の考えも強く否定し、男がなければ女はなく、女がなければ、男もなく、男女相和して家庭は存在し、社会が成り立つ。男は男だけでは欠けたものであり、女も女だけでは欠けたものであり、男女が合うしてはじめて一円な人となる。男の尊さ、女の尊さを互いに認め、男は女を助け、一円融合するところに完全な人間ができあがると言っている。

Q 11　民主的手法の「芋こじ」ってなあに？

A

昔、北海道の開拓農家で、新いも（ジャガイモ）の皮を大量にむくときは、右図のやりかたで芋の皮をむいた。まず、同くらいの長さの木の棒を用意し、それを真中より少し下を紐で結わえ、それを桶に入れた芋がかくれるほどに水をはった中に入れ左右の手でそれをもった棒を開いて交互に動かす。すると、芋は桶の中を左に右にゴロゴロと動きまわり、こじ棒にこすれる以上に芋どうしがこすれあって、泥が落ち皮がはげ、スベスベした白い肌の芋になることである。



これは、芋は人間であり、泥や皮は人の慾心のねじれ、怠惰などを表わしている。こじ棒は司会者役で、芋が擦れ合う手助けを芋どうしが擦れ合うということは、参加者が徹底した意見交換ができ、切磋琢磨とお互いに高まることができるのです。芋こじのとき、桶から外にとび出る芋はひろって桶に戻したり、協議を離れてよそ事を考えているような人を上手に協議にひきこむのは、この「こじ棒」にあたる「司会者」の役割と言える。

尊徳は、農村指導でよく「寄り合い」（集会）をもっているが、この時も「芋こじ」と称し、農民相互の知恵を出し合い、すべての情報を公開した。それによって農民達の自発性と相互教化を図り、相互扶助をすることを目的としていた。これはまさしく真の民主主義といえるものであった。

豊頃二宮地域の開拓（二宮尊親）においても、開拓の疲れから体を休めるたるための「農休日」とあわせて全員による「寄り合い」がもたれていた。

Q 12.　世界最初につくった信用組合「五常講（ごじょうこう）」とは？

A

尊徳は、服部家の借金整理に合わせ、中・下級武士の借金返済を目的とした「五常講」という互助金融制度も作った。そもそもこのもとは、尊徳が服部家の役人時代、要人や女中が借金で苦心でいるのを見て、当人たちに代わっての資金運用や、その人の収入に見合っ分度生活の面倒を見たが、仲間うちとの甘さから預ける金がへり借りる側に片寄ってお金が廻らなくなった経験から口約束では仕事が進まず、お互いの不振を招くとの考えから、その基本に契約が据えられた。五常講は、儒教にある五常、すなわち仁義礼智信という五つの根本原理をあてはめたもので、「金銭の積み立てや貸借では、確実に約束を守るのが最大用件」ということで、その意味合いは、仁義礼智信の五つは「信」の一字に要約されている。

この五常講はドイツのライフアイゼンで世界で最初に作られた信用組合より４２年も早く制度化され、この「五常講」こそが、世界最初の信用組合であったと言えよう。

Q 13. 「冥加金（みょうがきん）」とは？

A

江戸時代、営業を許可された者が、幕府または領主に納めた金銭。のちに、幕府が豪商にわりあてた献金のことです。しかし、二宮尊徳がいう「冥加金」はそれらとは違っていた。

尊徳は、善行表彰をいろいろな形式で行いました。農具を与えるとか、無利息金を貸すとかしました。それらは、村人の投票によって決めました。一軒に一人が投票権をもち、未亡人でも投票資格がありました。かって連合国総司令官マッカーサー元帥のもとで活躍した新聞課長インボーデン少佐が、日本における民主主義者として尊徳をたたえ、元大統領リンカーンに比すべき人物と評価しました。

さて、その尊徳が貸し付けた無利息金は五カ年賦となっていました。そして、貸し付けた翌年から、その元金の二割ずつ返済させました。つまり、五カ年で完済させるようになっています。人々は無利息金をありがたく思い有効に利用しました。それは村人たちにより認めらて投票という形で選ばれたことによるが、根本的には神仏のおかげとして受け止めるべき性質であると尊徳は教えました。だから、完済後に神仏へのお礼心でいくらか（元金の二割程度）を推譲するのが習わしとなっていました。それが冥加金と呼ばれるものです。これがお金を借りた人の人道です。その冥加金が報徳金に加えられるので、貸し付けるお金は年々増えていきました。

Q 14. 晩年の尊徳は どのような仕事をしたか

A

天保１３年夏、金治郎は幕府の老中水野忠邦から突然呼び出しを受けて、幕府の役人（御普請役格（ごふしんやくかく）の地位）にとりたてられ、「二宮金次郎尊徳」と名乗るようになった。

そして、彼が最初に与えられた仕事は、利根川ぞいの印旛沼（いんばぬま）（千葉県）から東京湾へ分水路を作る測量調査員の一員になることでした。当時、利根川は毎年増水のたびに印旛沼を氾濫させ、周辺の田畑に大きな被害を与えていた。この印旛沼の水を江戸湾まで流しだす水路をつくれというものであった。この調査で、尊徳の心を打つたのは印旛沼の農民の困窮ぶりであった。尊徳は一カ月の調査後、次のような服命書を提出した。

「まず、１４万両の予算で周辺の農村を立て直し、これを次々と広めながら、新しい財源と労働力を生み出し水路を延長する」という、まず農民を「救いつつ用水路づくり」

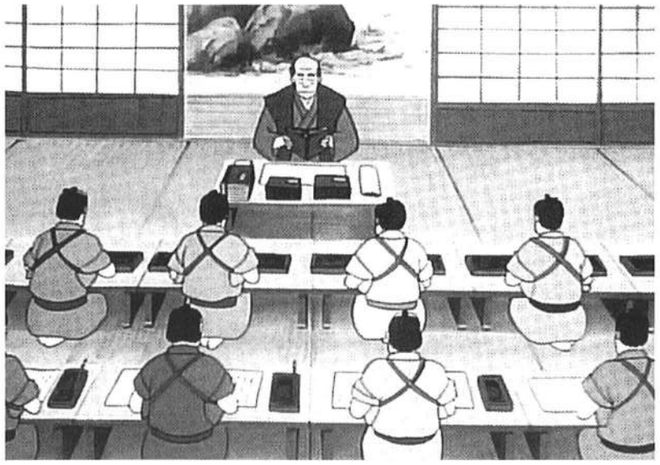
に取り組むものでした。

当然、この計画は水路の開発のみを早急に目指す幕府と対立、幕府の命令は下りなかった。結局その事業は、幕府の従来のやり方で着工されたが、失敗に終わっている。

弘化元年（１８４４）、尊徳５８歳の時に日光神領の荒れた土地を使えるようにする計画を立てるように、という命令をうけた。待望の仕事を得て喜んだかれは、すぐ日光に出発するつもりでした。ところが、幕府は現地を見ないですぐ計画書を出すようにというのです。尊徳はすぐにはできないと断りました。それは実際の土地を見ないで立案するのは無理だからでした。

しかし、尊徳は「日光神領復興仕法の計画書提出を命じられたことはまことに有難いことだ。なぜなら、将軍をはじめ全国の大名が日光東照宮参拝に来るのだから、日光神領の復興を見れば、それを手本として全国各地、いたるところで復興仕法が行われるに違いない」といい・・・高齢になった尊徳は、自分の手を離れても、だれにでも実施でき、どの土地にでもあてはまる仕法のひな形をつくることを考えました。

仕法のひな形づくりには、長男の弥太郎（尊行）を含め、２０人をこえる人々が協力しました。全精力を傾けた仕法のひな形つくりは３年の歳月をかけ、彼にとっては生涯の大事業『日光神領復興仕法雛形』８４巻をまとめあげ、幕府に献上したのです。

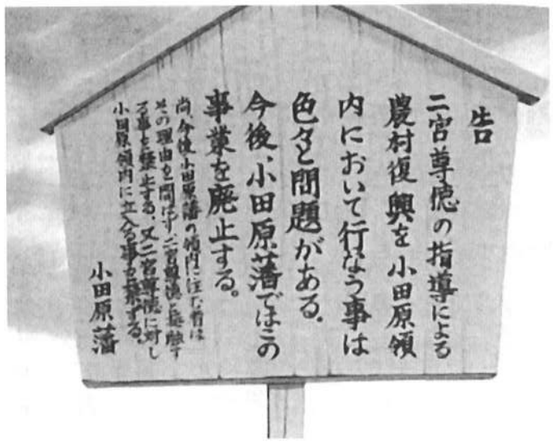


しかし、日光仕法開始の下命は幕府からなかなかおりなかった。当時、鎖国政策に通商、開国をせまる外国船の沿岸警備に忙殺されていた幕府側の事情もあったこともあるが、尊徳の最も理解者であった小田原藩の大久保忠真公が亡くなって、こうした尊徳のやりかたを「上をうすく　下をあつくするもの」と批判、「小田原藩への出入りを禁止する」という農民出身の尊徳への反発、いやがらせも渦巻いていたからである。

この間、尊徳は福島県相馬藩の依頼に応じ、弟子の富田高慶を派遣し相馬仕法の着手したり、財政難の日光神領に近い村々の仕法に力を注いだり、寄付をしたり推譲の心は絶えることがなかった。

日光神領復興仕法発業の下命を受けたのは、嘉永６年の６月、尊徳６７歳の時であった。以降、日光に着任した尊徳は高齢で病弱な身で回村したり、五カ村用水の開削など無理もたたり病気になってしまった。

その後、事業は長男の弥太郎（尊行）に引継がれ、日光神領仕法は継続され成功を収めている。



Q 15.　報徳仕法のひろがりは？

① 桜町の仕法　　位置　栃木県二宮町・真岡市の三部落
② 青木村の仕法　　茨城県真壁郡大和村
③ 細川領の仕法　　茨城県筑波郡谷田部町
④ 鳥山の仕法　　栃木県那須郡鳥山町外47カ村
⑤ 下館の仕法　　茨城県真壁郡下館町外30カ村
⑥ 小田原の仕法　　神奈川県足柄上、足柄下郡一円、静岡県駿東郡
⑦ 相馬の仕法　　福島県相馬郡相馬市を中心とする２２６村
⑧ 日光の仕法　　栃木県上都賀郡日光付近　８９カ村
⑨ 幕府直轄諸仕法
・大磯町　川崎屋孫衛門の仕法
・藤山町　江川太郎左衛門の仕法
・栃木県真岡付近・西沼村の仕法
・利根川分水路印旛沼の仕法献策
・茨城県水街道市大生郷村の仕法案
・茨城県真壁郡棹ヶ島・花田新田の仕法
・栃木県河内郡出口村・石那田村の用水仕法
⑩ その他諸州諸家の仕法

Q 16.　二宮金治郎のおいたちを略年表で見ると？

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと　国内の動き
幸福な時代	1716	享保元		徳川吉宗が幕府の改革に着手(享保の改革)
	78	安永７		ロシアの船が来航し松前氏に通商求める。
	83	天明３		浅間山大噴火。天明のききん始まる。
	87	７	１	金治郎　神奈川県栢山に生まれる。
	90	寛政２	４	弟友吉(後の三郎左衛門)が生まれる。
一家苦難の時代	1791	３	５	酒匂川がはんらんし、田畑の大部分流出する。
	96	８	10	大久保忠真が小田原藩主になる。
	98	10	12	父利衛門が病気で倒れ、父に代わり酒匂川の工事で働く。わらじを作り工事の人に使ってもらう。
	99	11	13	松苗を２００本を買い、酒匂川の土手に植える。弟　富次郎が生まれる。
	1800	12	14	９月　父　利右衛門が亡くなる。
	1	亨和元	15	貧乏のどん底生活を味わう。年末の用意もなし。
	2	２	16	母　よしが亡くなる。　酒匂川の洪水。金治郎はおじ万兵衛、弟達は母の実家に引き取られる。
一家建て直しの時代	1803	３	17	菜種を収穫する。捨て苗から米一俵を得て「積小為大」を悟る。
	４	文化元	18	万兵衛方を去り、名主岡部方に出いりする。
	６	３	20	生家の近くに小屋を建てて独り立ちする。田畑９アールあまり買い戻す。
	７	４	21	弟富次郎が亡くなる。米、金の貸付や小作料の収入がふえる。
	10	７	24	田畑１．４６ヘクタールとなる。江戸・伊勢・関西を旅行する。
	11	８	25	学問のため本を買い入れる。小田原藩家老　服部家の若党(わかとう)になり、息子の教育係りなどをつとめ自分も勉強する。

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと　国内の動き
隣人救助時代	1814	11	28	服部家の使用人を中心に「五常講」を作る。
	17	14	31	中島きのと結婚。田畑３．８ヘクタールとなる。
	18	文政元	32	服部家の立て直しを引き受ける。
				１１月　藩主大久保忠真から表彰される。
	19	2	33	長男徳太郎誕生するが死亡。３月きのと離婚。
	20	3	34	４月　岡田波子と結婚。年貢のますの改良がとりいれられ、藩士の五常講を作る。
	21	4	35	金治郎の嫡男(ちゃくなん)弥太郎（尊行）生まれる。
桜町再興の時代	1822	5	36	小田原藩に登用（名主役格）。
				桜町領の立て直し命じられる。
	23	6	37	田畑・家財を売り払い桜町に引越す。
	24	7	38	長女　文子誕生。
	28	11	42	桜町で反対や妨害を受け、苦しい日々を送る。
	29	12	43	成田山で断食修行。帰ってから事業円満に進行。
	33	天保４	47	凶作を予知した対策をとる（秋ナスの話）。
仕法が広まる時代	1836	7	50	**諸国大凶作（天保のききん）** 鳥山藩を救急援助。
				桜町領の立て直しが終わる。
	37	8	51	小田原藩のうえた人々を救う。大久保忠真死亡
				鳥山藩の立て直し始まる。
				大塩平八郎の乱がおこる。
	38	9	52	小田原領、下館領の建て直し始まる。
	41	12	55	桜町で谷田部・茂木・下館・小田原等藩や領の指
	42	13	56	導続ける。
	43	14	57	幕府の役人になる。利根川分水路測量調査する。
	45	弘化２	59	「尊徳」と名乗る。
				相馬藩の農村の立て直しが始まる。

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと　国内の動き
日光たてなおしの時代	1846	3	60	日光仕法のひな形完成
				小田原藩の仕法を打ち切られる。
	53	嘉永６	67	日光領の立て直しを頼まれる。
				尊徳江戸で発病する。
				アメリカのペリー来航・ロシアの軍艦来航
	54	安政元	68	**日米和親条約締結し、下田を開港する。**
	55	2	69	尊徳の孫金之丞（尊親）誕生する。
	56	3	70	１０月２０日、尊徳今市で亡くなる。

注１　当時年齢は数え年で　　注２　名は**金治郎**であったが、36歳の時**金次郎**と書くようになる。

Q 17. 二宮尊行・尊親の略年表で見ると

区分	西暦	年号	年齢	主なできごと　国内の動き
尊行・尊親へ受け継ぐ時代	1857	安政４	37	日光仕法の瀬川用水・轟用水の改良工事完成
				函館奉行の要請により門弟を蝦夷地(えぞち)に派遣
				尊行が幕府から御普請役格に任じられる。
	58	5	38	尊行配下の大友亀太郎が蝦夷地にわたる。
	66	慶応２	46	日光，轟村の一村式仕法が完了する。
	67	3		**薩長両藩の倒幕、徳川慶喜が大政を奉還する。**
	68	4	48	尊行が仕法書類を相馬へ疎開、
				日光仕法中止し、相馬に移る。
	68	明治元		**年号が明治となる。**
	71	4	50	二宮尊行が病死する。
	77	10	22	二宮尊親（尊徳の孫）が富田高慶と共に相馬興復社を起こす。
	97	30	42	尊親が北海道十勝原野の開拓に着手する。

二.　「きんじろう」と「尊徳（そんとく）」の裏話（うらばなし）

柴（しば）をかつぎながら読書をした親孝行息子の金治郎の話は有名であり、銅像となって今も残っている。

さて、この話は「向学心に燃えた親孝行者」の少年として美化され、修身の教科書にも取り上げられているが、当時の社会的経済状況の中では、どのような目的で、どのように扱われていたのかを推測し、お話をただ単なる根性物語にしない歴史の見方が大切ではなかろうか。

Q 1　名前は「金次郎」か「金治郎」か？

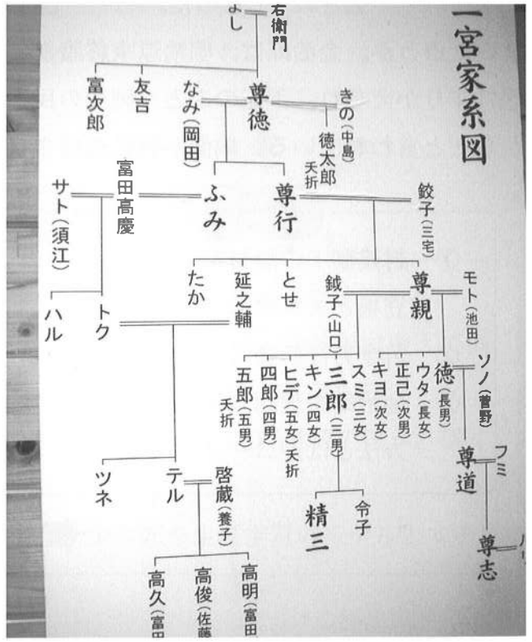
A

二宮きんじろうは、「金次郎」か「金治郎」かどちらが正しいか？

しかし、調べてみると書かれている書物の記述もまちまちである。そんなこと、「どちらでもいい」と言われてしまえばそれまで。

そこで、二宮家の家系を調べてみると「きんじろう」は二宮利右衛門の長男として、小田原栢山で生まれている。長男に「次」の字を使うのはどうも合点がいかない。

小田原の中流農民であるとすれば、家を継ぎ「お金を治め」家計をきりもりし



てほしいという親の願いがこめられていると見るのが妥当であろう。昔から、「名は体を表す」という諺がある。確かに、「きんじろう」は、よく働き、よく勉強もし金儲けも上手であったことがエピソードとして残っている。

ことの起こりは、「きんじろう」は農民の子どもでありながら出世をしたのがきっかけであると思われる。出稼ぎ先の服部家で、「金儲け」と「金の運用」が上手な金治郎を見込み、地方公務員として桜町の財政再建に当たらせた。

桜町の再建を果たすと、次に国家公務員たる幕府の役人に抜擢されたのである。ここで、幕府の勘定所詰御普請役格「二宮金次郎尊徳」と命名され、この時に『治』が『次』に間違えられて記録された。または、農民出身だから「治める」はふさわしくないと金治郎に反発する役人が意図的に記したとも考えられる。

以上のような事実やそこから推測されることから、私が使う「きんじろう」の記述はいっさい「金治郎」とすることにした。

Q2. 戦後、なぜ「金治郎像」が消えていったか？

A

いま、十勝管内の学校に金治郎の銅像があるのは何校あるだろう。かって、どこの学校の庭にも見られた風景であったのに、戦後こぞって撤去されてしまった。・・・それでは、なぜ金治郎像がこのような運命にあったのだろうか。金治郎は、明治以来終戦まで修身の教科書に登場し、報徳思想が報国思想にすりかえられ、下記のごとく戦後の民主主義教育に逆行するものとして考えられたからだと言われている。銅像が戦後追放された理由としては

① 封建制下の農村指導者であるということは、民主主義の下の現代教育の立場とズレがある。
② 苦学力行の姿は、忍従を強いるから、教育基本法の趣旨に合わない。
③ 金治郎を理想人物として押し付けるのは、児童の判断を尊重する新教育方法とは逆コースである。

Q3. これからの社会で「金治郎像」に何を期待するか？

A

さすが心田塾構想による町づくりを進める「報徳の町豊頃」である。いま、豊頃町内には小学校・報徳館・える夢館等6体の金治郎像が学校や公共施設前に設置され、今も子供達や町民の目にふれることができることは嬉しいことである。

なぜこのような誤解を招いてしまったのであろうか。原因の一つは、あまりにも徳目中心で美化しすぎたきらいがある。もっと、「人間金治郎」という生身の理解がなされなかったからではないか。

二つ目は、「少年金治郎の美化」にとどまり成人したその後の「尊徳の業績」や「報徳思想の正しい理解」がされていないことにあると考えられる。

それでは、これからの時代の金治郎像は、どのように解釈すればよいのか・・・元静岡県掛川市長榛村純一氏は、下記のように生涯学習の原点として金治郎像を捉えている。豊頃町に於いても、生涯学習の拠点「える夢館」前に金治郎像が設置されていることもうなづけることである。

生涯学習の原点を金治郎像に求めたい

① 偉い人の銅像で、その少年期が銅像になったのは二宮金治郎だけである。
② 百姓の小せがれは勉強する必要がないと言われた時代に、金治郎は敢えて内発的に自ら進んで勉強をしたから美しい。これは教育の本質である。
③ 薪を背負って本を読む（働きながら勉強する）姿は、生涯学習で言う、働くことと勉強することは同じことだと言っている。
（今、働くこと勉強することの分離 ➡ 金治郎を生涯学習のモデルとする）

Ｑ４．　金治郎のかついだ「柴」は、どこから、どこへ？

A

金治郎５歳のとき、川が氾濫し、金治郎の家も土地も流失してしまった。金治郎１４歳のとき過労でたおれた父親をなくし、まもなく母親も亡くしてしまう。親戚が集まって相談した結果、弟２人は母親の生家に、金治郎は伯父の家に引き取られ、兄弟バラバラに生活するという、不運な少年時代であった。

さて、金治郎の柴や薪は何処から入手し、どこへ持って行ったのであろう。親のいない金治郎には土地も里山もないのに、どこからどうして手に入れ運んできたのか不思議なことである。金治郎の住んでいた足柄平野の栢山（かやま）村から西に半里（２キロ）歩くと足柄峠の麓にたどりつく。矢佐芝山、久野山、三竹山などの里山が入会地であった。この入会地を狩川に沿って二里ほど下ると小田原の市街地（１１万石の城下町）があり、そこで売りさばいていたのである。金治郎の柴や薪はやはり入会地からのものである。村の共有財産である入会地で柴や薪を拾うにも、入山できる期間や採取できる量に厳しい制限がある。大人がやったら村人から咎（とが）められるのだが、金治郎は少年でありその境遇から大目に見てもらい、見て見ないふりをする村人の優しさがそこにはあったとしか考えられない。

Ｑ５．　なぜ、柴を運んだか……「柴」のお値段は？

A

銅像「少年金治郎の背の柴」はリュックサック程度、いかにも軽そう。だが、実際には柴だけでなく薪も加え背負子にかつげるだけ載せ、荷は身長をはるかに上回っていたと考えられる。

なぜなら、両親をなくし貧乏のどん底の金治郎の生活を支える現金収入の重要な手段でもあったからである。

では、金治郎が柴を売った、二百年前の江戸時代と現在の一般家庭の家計費と光熱費の比較をしてみると、意外にも自給自足の江戸の方が光熱費の割合が高いことがわかり、金治郎の薪は非常に高く売れた事がわかる。

（「文芸春秋」平成１７年１１月号より）

江戸（小田原藩藩士小川太右衛門）⟷ **現代**（家計調査年報０２年版）

（貨幣価値を現代に換算すると）⇨ １両はだいたい 10万円～ 20万円

一年の消費支出（１８５２年）
２４両２分２朱

（内訳）
食費～６両、諸謝礼～１両３分
醤油～１両２分、炭～１両２分
味噌～３分２朱、　薪～２両
水油～１両２分、　掛払～６両
親類音物～１両２　その他１両
馳走客用～１両

飯を炊き風呂を沸かす薪や料理や火鉢に使う炭代を合わせ、

家計費の１４．２％

一年の消費支出（２００２年）
３２３万８千円

（内訳）
略
光熱費等への支出は
２１万２千７百円
光熱費は
家計費の　６．６％

Ｑ６．「金治郎」は、なぜ「林蔵」とよばれたか？

A

２５歳になった金治郎は、箱根道の風祭村に薪山を２分２朱（０．６２５両）で購入している。市街地から離れた雑木林などは文字通り二束三文の値打ちしかないので入手できた。商才にひいでた金治郎は、［薪山三倍］に気づいていたのである。市街で売る薪の値段は山代を一とすると、切り賃が一、運び賃が一で三倍になる。自分で木を切り、自分で運べば儲けが増える。

金治郎は２６歳で小田原藩服部家の若党（奉公人）となった。若党になれば武士の従者として、武士の息子の勉強を教えに行くお供ができ、障子の外で学ぶことができるからである。また、休日に薪を担いで小田原の城下町や宿場を売り歩き、林蔵と呼ばれるようになった。勉学と金儲けの一挙両得といところであった。

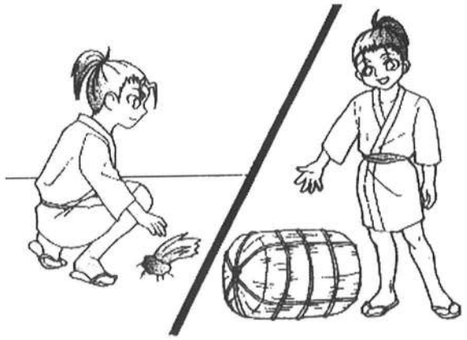
Ｑ７．どう「積小為大」という言葉を生み出したか？

A

菜種油と捨て稲苗

父を亡くした金治郎は、伯父の万兵衛に引き取られ働かねばならなかった。学問をするには夜学をするしかなく、灯油も買えなかった。そこで友人に借りた一握りの菜種を堤防に近い荒地に蒔き、一年後には８升（１４．４リットル）あまりになり、油屋で油に交換してもらった。また、道端に捨ててあった稲の残りを拾い、荒れた田に植えて，秋には１俵（６０キログラム）余りの米を収穫した。

「積小為大」



釜のススとり

金治郎が奉公人の時、同じ仲間の飯炊き女中にこのように忠告した。「釜や鍋の底につくススが入用だ、せっせと磨いてとってくれ。それが一升たまったら二文で買ってやろう．何升でも持っておいで」これで，燃焼効率がかなりちがってくる。よく磨いてあれば、十本の薪が八本で済む。一つの釜で薪を二本、別の釜で二本、風呂で三本と毎日

節約したものをためていけばかなりの量に増える。金治郎はこれをもって「積小為大」と言ったのである。

Ｑ８．尊徳像を、なぜ「鶏鳴廻村像」と言われたか？

A

豊頃町役場庁舎前に設置されている「二宮尊徳像」は、昭和６３年に小田原市の田島　亨氏から寄贈された数少ない成人像であると言われている。

小学校の校庭にある「二宮金治郎像」とは、決して同一人物とは考えにくいものがある。なぜなら、金治郎は農民の子であり、帯刀しチョンマゲ姿の颯爽とした成人尊徳像（身長１８２ｃｍ、体重９４ｋｇ）とは、あまりにもかけ離れているからである。

二宮尊徳は、小田原藩　大久保忠真公より、その分家の宇津家領桜町（今の栃木県二宮町）の復興事業を懇請され、家財一切を売り払い桜町に赴任した。翌朝から地方公務員となった尊徳は率先垂範、農村の一番鳥が鳴く４時に起床し、夜は８時まで一軒一軒の農家を訪問し、農民の働きぶりや暮らしむきを調べ農民の立場になって指導した。

尊徳の銅像の表情は一見威風堂々にも見えるが、厳しさに耐える渋み（苦悶）のある顔でもあるように見える。農民あがりの尊徳に対して、これまで尊徳より地位の高かった武士や地元のボスが尊徳の仕事の妨害や反対をしたので、なかなか計画通りには進まなかったのも事実のようである。

尊徳は苦悩の末、成田山新勝寺にこもって２１日間の断食修行をしたことがあった。そして、「一円観」という悟りを開くことができた。それは、世の中のあらゆる対立する物を一つの円の中に入れて観る立場。そして、その一つの円の中におさまることを「一円融合」と名づけた。

世の中には善悪・強弱・遠近・貧富・男女・明暗・労使・貸借等、対立（対称）するものが沢山ある。一円観で世の中を見ると、この世には絶対の善人も絶対の悪人もいな

い。善人にも短所があり、悪人にも長所がある。その長所を引きだすことが大切である。反対者には反対の理由があり、そういう反対が出るという事は、まだ自分に誠心が足りないからと悟ったのである。対立したままでは何も生まれない。「万象具徳」、それぞれの徳（よさ）を出し合い協力することにより世の中が生々発展すると言うのである。この後、反対や妨害も減り、桜町復興事業も大いに前進したと言われている。役場前の銅像を見るとき、この事実を知り農民の立場で奮闘した苦悩する姿として尊徳を見てほしいものである。

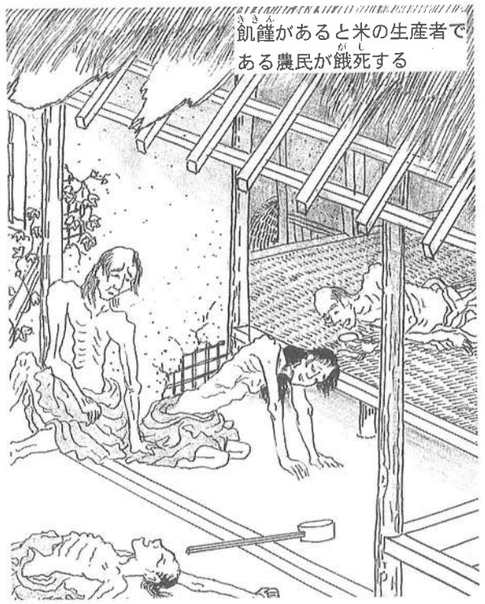
Q９．　農民を救った「秋ナスの味」とは？

A

江戸時代には何度も大きな飢饉におそわれている。中でも天保の大飢饉の時には、奥羽地方だけでも十万人の餓死者が出たとされている。

しかし、ある地方では一人の犠牲者もでなかった。それが、二宮尊徳の傑出した指導力の賜物であると言われている。

（平成１８年ＮＨＫ番組「その時歴史が動いた」でも放映された）

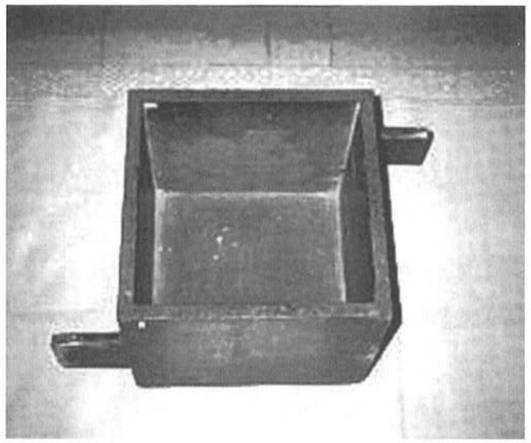


ある時、尊徳が廻村中たまたまごちそうになったナスの味がどうも普通ではなく、夏の始めだというのに秋ナスの味がした。これは凶作の前兆に違いないと考えたのである。現代ではほとんど野菜に旬がなくなり、微妙な味の違いを感じたとしても「ちよっと変だな」くらいが普通であろう。しかし、これは凶作の前兆と感じたところが尊徳の日頃の観察眼や洞察力の鋭さ、凡人とは違う感性の持ち主であったことがわかる。彼は、農民たちにすぐに稲をぬくよう指示したのである。当然農民の反発にあうが、説得を繰り返し、その後に冷害に強いヒエ等を植えさせたのである。その結果、その地域を飢饉から救うことになる。すでに成長している稲を抜かせるのは大変な決断であり、ほとんどの農民がそれに従ったというには絶対の信望があった証であろう。

Q 10.　なぜ、三はいで一俵の「斗枡」をつくらせたか？

A

金治郎は服部家の財政再建にかかわるが、小田原藩全体の年貢米をはかる斗枡の統一を提案し採用させる功績があった。諸藩の年貢米は大阪に回されて売却されていたが、小田原藩の年貢米を図る斗枡が１８種類もあり不統一で、農民を困らせていた。小田原藩では一俵は四斗一升だったが、ところが斗枡がまちまちだと四斗だったり四斗三升だっりした。公定では三斗七升だが、口米・延米など何升か付加税がつく複雑な納税法になっていた。そこで、金治郎は三杯でぴたり一俵四斗一升となる新しいサイズの巨大な斗枡を作らせ認めさせた。このことにより、農民をこまらせる不正を防止するだけでなく小田原藩の米は取引先の信頼を回復し市場価値を高めていったと言われている。



二宮通尚さん所有
小田原市寄託（尊徳記念館所蔵）

Q 11.　金治郎の考案した金融モデル（五常講）とは？

A

五常講は、金治郎が紹介した低利融資制度（金融モデル）の到達点であった。五常とは四書五経の中の徳目のうち、忠・孝・悌を除いた「仁」「義」「礼」「智」「信」の五つの徳目である。

これは他人との関係を重視し、約束事を重んずる徳目である。例えば、十両借りるとすると、原則的には五年賦利息返済で年額二両ずつ五年で完済される。ところが、完済することができた人間には「五年間二両ずつ返済しても生活できたのだから、あと一年、二両支払らっても大丈夫だろう」と、六年目に「冥加金」（お礼）と称し、もう二両推譲していただく」というやりかたである。六年目の二両は実質的な金利と考えていい。それだけでなく借金を返済しておしまいではなく「互いに推譲し合うシステムを尊重すること、借りたら返せ、貸したら無理な返済させるな」という信条が金治郎の投資ファン

ドを大きくしていった。分度が明らかになれば、これを上回る収入があれば、その収入は桜町領の復興資金として投資され、その結果、復興資金は荒地を起こすための用水堰などの土木事業、一軒一軒の農家が抱える借金を整理し返済させる低利融資制度の元本に遣われたのである。この金治郎の五常講は日本の協同組合の前身となる。

Q 12.　財政再建の決め手に、なぜ「分度」に着目したか？

A

１８２２年、金治郎は小田原藩に登用され、桜町仕法に乗り出した。金治郎は財政破綻、労働人口の減少（三分の一）、労働意欲減退の桜町の改革に服部家やこれまでの経験から、「分度」を持って改革に臨んだ。

まず、金治郎は鶏鳴廻村をして農民の相談にのったり、徹底的に土地の状況や農民の実情を調べ上げた。そのうえ、無理のない年貢米を科学的に「分度」をもって決定し、行政にも緊縮財政の運営を求めている。次頁枠内が尊徳の桜町仕法。（桜町農民の土地状況と実態を科学的に調査し、可能な年貢米の量を分度をもって決定し農民に働く意欲と節約を求め、宇津家にも贅沢を廃する生活、節約の分度を求めて、財政の健全化を図った）

桜田陣屋跡（国指定史跡）
１６９９（元禄１２）年創立された役所跡で
尊徳が２０数年間居住した

尊徳の桜町仕法の手順

① 栃木県桜町領（二宮町）の人口は元禄時代１９００人であったが、文化文政期はその三分の一に減少し生産力も減少していた。（桜町の家々は極貧で衣食足りず、人身荒廃の局地にあった。）

② 尊徳は、桜町の土地状況（生産力の実際）を詳しく調べ上げた。
宇津家の石高は４０００石（田６割で２５００石、畑４割で１５００石）
しかし実際の土地状況は、
田の荒地と生地の割合は７対３、畑の荒地と生地の割合は４対６、
したがって、荒地率からみて宇津家４０００石は（田７５０石、畑は９００石しか生産できない）
そこで、年貢が米４．４割なので７５０石に対し、３３０石
畑の年貢は田より低くて３割、農民は自由に売る（金納）ことができたので田は荒地のまま放置しても畑に余力をまわした。

③ そこで、尊徳は過去の記録から農民が納めることが可能な年貢米を割り出した。
・宇津家１００年前の年貢米平均は、米３１０６俵、金納２０２両
・宇津家直近１０年の年貢米平均は、米９６２俵、金納１３０両
そこで、「古今盛衰平均台帳」をつくり、今後十年間の年貢高を決定、宇津家の支出はこれを超えてはならないと武家に節約を求めた。

三.「報徳のおしえ」とは

Q 1　「報徳訓」を、やさしくすると？

A 1　かな「報徳訓」より　……　佐々井 典比古 作

一連　てんちのいのちでいきている　せんぞのいのちでいきている
おやのいのちでいきている　しそんにいのちをつたえよう
いのちをしっかりつたえよう

二連　ぶんかのめぐみでくらしてる　せんぞのめぐみでくらしてる
おやのめぐみでくらしてる　しそんにめぐみをつたえよう

三連　ごはんのおかげでいきている　きもののおかげでいきている
すまいのおかげでいきている　たはたのおかげでいきている
やまのおかげでいきている　うみのおかげでいきている
こうばのおかげでいきている　みせのおかげでいきている
みんなのおかげでくらしている　もちばもちばでつとめよう

四連　きのうのごはんできょういき　きょうのつとめはあすのため
きょねんのみのりでことしいき　いつでもしっかりとくいかし

A2　今こそ「報徳」より　……　豊頃町教育委員会

1　われわれ人間の肉体的生命は、父母祖先から子へ孫へと伝わり、終わることのない永遠のものである。

2　この天から与えられた生命を支えているのは富貴である。
富貴、すなわち衣食住に恵まれ、豊かな社会生活、文化生活を営むことが出来るのは, 父母祖先の代々の勤労・善行のおかげであり自分一代でできたり、無くなったりするものではない。
よくこのことを感謝し、勤勉努力して子孫へ受けついでいかねばならない。

3　その富貴のもとである生産は、田畑山林（自然）の恵みと、これに積極的に働きかける自己の勤労によるものである。

4　昨年の生産で今年の豊かな生活ができ、今年の生産で来年の安全な生活がなりたつように、計画的な暮らし（分度～推譲）をしなければならない。

5　これを貫くためには、天地自然の恵みや、父母祖先をはじめ、多くの人々の社会的協力のおかげで現在の自分が存在することをよく自覚し、至誠を持って実行しなければならない。

Q2.「至誠（しせい）」ってなあに？

A

尊徳のおしえを「至誠」、「勤労」「分度」「推譲」の四つであらわすことができ、これを報徳の四綱領（こうりょう）と呼んでいる。

最も核となるのが至誠であると言われている。

「至誠」は人間の根本を形成するもので「まこと」「まごころ」をもって人間生活を一心に貫き通すことであり、影ひなたなくまじめに生きることである。

尊徳は「至誠は神の如し」とも言っている。また，ひたむきに目標に向かって、まっすぐ一生懸命努力するという教えで報徳の土台をなすものである。挿絵を例にすると、釜（豊かな暮らし）を支える三本足（勤労・分度・推譲）の鼎（かなえ）である。　私たちは、今を充実させ明るい未来を発展させるため、「あかるく　ひたむきに」、心の田を耕しつづけたいものである。

Q3.「勤労（きんろう）」ってなあに？

A

「勤労」とは、よくはたらくことを言い、人間は米一粒、菜っ葉一枚といえども自分の力だけではつくることができない。

すべて天・地・人、三才（三つのはたらき）の恩恵によるものであることを自覚した、徳に報いるためのまことのはたらきを勤労と言っている。人は働くことで食べ物を手に入れたり、生活することができる。また、働くことを通じて知恵を磨き、自己を向上させることができるという教え。

また勤労とは、めちゃくちゃに働くことではなく、工夫し計画的に働くこと、効率を高くすることが大切で、報徳のはたらきであることから、常に社会的視点にたって、社会公共の為に働くべきであると言っている。

昔の勤労観は、農業による生産労働が主で、「体を動かす」ことが前提になっていた。

しかし、現在は肉体労働だけでなく、パソコンを使った知的労働や福祉や文化活動、更には「学ぶこと」も含めた広い捉えが必要と考えられる。

町生涯学習部会では、人々のあらゆる職種・立場や生産活動において「生活を向上させる前向きな営み」を総称して「いきいき　小さな積み上げを」期待したいと考えた。

Q４．「分度（ぶんど）」ってなあに？

A

「分度」とは、天分の度合いということであると言っている。

「分」は人間に与えられた天分（条件）のことであり、その天分の中でどう生きるかと言う度合いを「度」ということである。尊徳が最も強調したのは経済上の分度で、「入るを量り　出を制する」こと、つまり分度の確立である。尊徳はまた、「国家の盛衰貧富は分度を守るか失うかによって生ずる。分度を守れば繁栄し、分度を失えば貧困に陥る。国家が衰貧に陥ると借財（しゃくざい）したり、人民からしぼり上げたりして国費を補うが、それは種子を蒔かずに刈り取ろうとするようなものである。そういう時は、分度を守り農民に恵み、荒地を拓くべきである。そうすればやがて税収が増して国が富むようになる」と、農民だけでなく領主にも分度を求めている。やさしく現代の生活に置き換えて言うと、分度は個人や家庭生活の収支のバランス、会社や工場・企業の経営、あるいは市町村や国の財政にも通じる最も大切な大原則でもある。言うならば、分度生活を実践する最も肝要なことは、自分を抑える克己心を持ち、自分の置かれている経済状況や立場をわきまえて、それにふさわしい生活を送ることが大切であり、見栄や外聞を気にしない勇気を持つことであると言っている。

町教育研究所生涯学習部会では、この分度の考え方を広くとらえ、人が生きる上で、家庭・学校・地域（集団生活）における自己の立場や役割、自然環境や資源の問題とのかかわわりを問うこと、すなわち自然や社会とのかかわりで「それぞれのよさ　自己を見つめる」生き方であると解釈をした。

尊徳は分度を立てるに際して、自然の摂理である四季にヒントを得て、総収入を四つに分ける「四分分度法」を考えだした。

まず、総収入（円全体）の半分を「分内」とし、あとの半分を「分外」とします。更に、分内を経常費と臨時費に、分外を自譲と他譲にわける。四つに分ける割合は、人それぞれの生活状態、地位、職業、財力等によっても異なり、決して一律ではなく人によって分度を決めることを説いている。

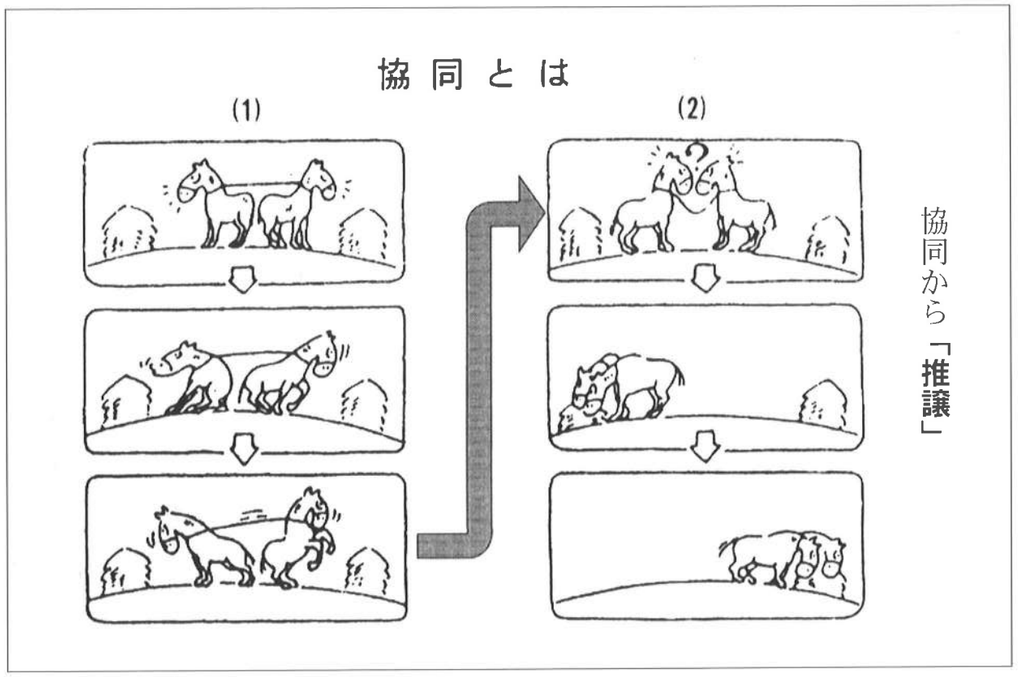
Q５．「推譲（すいじょう）」ってなあに？

A

推譲とは，文字どおり「推し譲ること」である。自分の将来に向けて、生活の中で余ったお金を家族や子孫のために貯めておいたり（自譲）、他人や社会のために譲ったり（他譲）することで、人間らしい幸福な社会ができるという教えである。

尊徳は、「獣（じゅう）の手は、自分の方にしか掻（か）くことができないが、人の手は物を我がほうに取り寄せたり、向こう（他者）にも押しやることができる」と述べ、人たるものは自他共存の生き方をすべきと言っている。

豊頃町教育研究所では、この「推譲」という言葉を今の言葉に言い換えるなら、共同、協同という**「ゆずる心で　共に生きる」**～自然や人に対する**「やさしさ」「おもいやり」**の心～「ボランティア」につながる**「共生」**の心と解釈をした。



Q6. 「積小為大（せきしょういだい）」とは？

A

小さな努力をこつこつと積み重ねていけばいずれは大きな収穫や力に結びつくという教え。

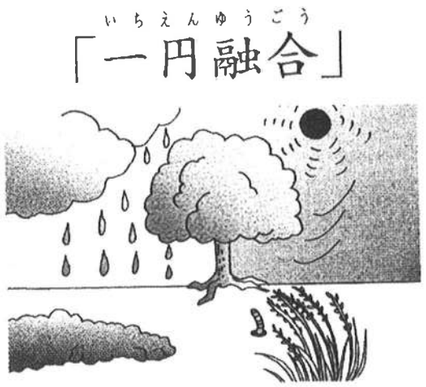
大きなことを成し遂げるには、まず、小さなことを怠らず、行うことが大切である。とかく人間は、小さいことをきらい、大きなことばかりに目がいくけれども、大きなことは本来小さなことの積み重ねであり、小さいことをおろそかにするものは大きなことなどなせるわけがない。小さなことをおこたらず積む努力をしなければならないという尊徳の教え。「ちりも積もれば山となる」である。

Q7. 「一円融合（いちえんゆうごう）」とは？

A

尊徳のものの見方、考え方は、この世の中で相対するものはすべてが互いに働き合い一体となっている。だから決して切り離して考えるのではなく、両方をあわせて一つの円の中に入れてみるというもので、これを「一円観」という。

そして、生命あるものはいつかは死に、また、生まれてくるといったサイクルが永遠にくりかえされている。たとえば、植物は種をまけば、やがて草となり花を開き、実を結ぶ。その花もやがてはかれ、土に帰る。



そして、その種が残りやがてまた芽を出す。このように世の中のものは、そのままの姿でとどまらず、次の形や新しい形になってあらわれてくる。そのためには、いくつかのものと結びつき、あるいはとけあっている。たとえば、種が草になるには、水や修分や温度、日光、種の生命力などがとけて一つになっていく。これを一円融合という。

Q8. える夢館前の金治郎像に、「以徳報徳（いとくほうとく）」という言葉があるが、どんな意味か？

A

尊徳は青年時代の体験から荒地にもふしぎな力がひそむのを知った。菜（な）種（たね）にも捨てる苗にも、すばらしい力が隠れていた。藁（わら）をなって縄をつくり、わらじを作り、竹を裂いて竹かごを器用につくりながら、物にはなんといろいろなはたらきがあるものかと思った。

尊徳は桜町に赴任する前に、こんな道歌をつくっている。

はき捨つる　ちりだに積めば
おのずから　竹の子らまで　みなふとるらん

「荒地は荒地の力によって起こし返し、借金は借金の費えによって返済する」というやりかたを発明していた。また、成田山にこもり断食修行をしたあと、どんな人にも良さがあり、役に立つところがあると考えてそれを育てる気持ちになった。それでもまだ、そういう力、そういうはたらき、そういう長所を統一して、なんと名づけるべきか尊徳はわからなかった。ところが、尊徳が天保２年、桜町仕法の経過を藩主に報告した時、藩主の大久保忠真は、「そちのやりかたは、論語にある『徳をもって徳に報いる』というやりかただな」と言われ、ここで彼は長い間求めていた自分の考えの表わし方を得たと思った。

荒地の力、捨て苗の力、藁のはたらき、それから十人十色の長所・美点、そういうもの総称して「徳」と呼ぶことにしょう。そうして、すべてのものに潜んでいる徳を人間の力

で引き出し、役に立てることを「報いる」と呼ぶことにした。釈迦が生まれたとき、『天上天下唯我独尊』と言ったと伝えられているが、これは自分のことを自慢したのではない。天地間のすべてのものは、他のものにない独特の尊さをもっていることを説いたと考えたい。

「徳」という言葉は、昔から「高徳の僧」とか「聖人の徳」等と、特別な人格的な価値だけに用いられていたが、尊徳はこの世に存在するすべてのものに、「徳」が存在すると考えた。

「徳」とは？

二宮尊徳は、物や人のもっている「良さ、取りえ、持ち味」のことを『徳』として、その徳をうまく使って社会に役だてていくことを『報徳』とよびました。尊徳は、「あらゆるものに　徳がある」と考えました。これを『万象具徳』といいます。この万象具徳の内容について、小田原の報徳博物館　元館長の佐々井典比古さんは次のような詩で表現しています。

万象具徳

どんなものにも　よさがある
どんなひとにも　よさがある
よさがそれぞれ　みなちがう
よさがいっぱい　かくれてる
どこかとりえが　あるものだ
もののとりえを　ひきだそう
ひとのとりえを　そだてよう
じぶんのとりえを　ささげよう
とりえととりえが　むすばれて
このよはたのしい　ふえせかい

＊「ふえせかい」は増え世界　（限りあるものから限りないものが生み出される）のことです。

四.　二宮尊親の北海道（豊頃）開拓

Q 1　尊親（尊徳の孫）の北海道移住の理由は？

A

二宮尊親は祖父の二宮尊徳が、日光（栃木県）で仕事をしていたとき、日光の今市で安政２年に生まれたが、明治元年には父尊行と共に相馬（福島県）に移り住んだ。父尊行はまた報徳の教えに従い荒れた土地を開墾させるため住民にお金を貸し相馬の開拓を進めていつたが、明治維新（明治２年版籍奉還、明治４年廃藩置県）で政治のやり方が一変したことから、事業が行き詰まってしまった。一番困ったのは貸し金が回収できなくなってしまったことである。

明治１０年、富田高慶らと共に二宮尊親はご仕法中止に変わる、「興復社」を創設し衰えた地域の復興にとりかかった。しかし、長くは続かなかった。それは、国の政策が変わってしまったことと、本州で荒地を開墾し豊かな農村をつくろうとしても、なかなか適地が見つかりません。そこで、高慶の死後、尊親はその行き詰まりを打開するため、広い土地を開拓したいと希望する人たちを北海道に移住させ、未開地を開墾し、新しい村を作り、日本農業の発展に寄与しょうと考えたのです。

Q 2　尊親は どのように土地を見つけたか？

A

十勝岳に源を発した本道第三の大河十勝川は、十勝中の水を集めて海に注いでいるが、十勝の歴史はこの川を抜きにしては語ることはできない。文久３年（１８６３）、青森県の堺千代吉が豊頃町に住む場所を構え、これが十勝で和人が住み着いた始めである。（十勝発祥の地）当時は一面が未開の地で、狩や漁を営むアイヌの人達の家が点在していた。やがて、明治２年に開拓使庁が設けられ、その直轄となり、明治１３年には役

場が大津に置かれた。この頃近くの原野に入植が始まり、明治２９年から植民地区画が行われるようになったため、内地府県からの移住民も次第に増え、大津に上陸後、陸路や十勝川をさかのぼって、十勝内部に入植していった。

二宮尊親も、明治２９年に土地を求めて北海道各地を探検した。十勝に入ってもなかなか理想とするよい土地が見つからず、腐心（ふしん）の帰途の大津の宿で、「ウシシュベツという良い所がある」と聞き、現地に詳しいアイヌ人のトカンの案内を頼んだ。

十勝川を進み、ウシュシュベツ川をモイワからさかのぼり小高い丘（二宮報徳神社）より四方を見渡し、「これぞ探し求めた理想の郷」と、当地を興復社開拓の地と決定した。

尊親の理想の土地三条件

① 大原野の中央でなく、丘か山に隣接していること

② 土地が肥沃で水害の少ないところ

③ 運輸交通の便利なところ

Ｑ３　尊親の 二宮開拓はどのように？

A

興復社社長になった二宮尊親（にのみやたかちか）（そんしん先生と呼ぶ人が多い）は、明治２９年（１８９６）移民の入植地に、十勝川下流部、豊頃（とよころ）村のウシュシュベツ川沿岸を選びました。そこに農耕用地として４０３万０，４３６坪の貸付を受け、のちに牧場用地３９５万１，７２７坪を買い入れましたから、約２，６６０ヘクタールの大農牧場がそこに出現するのです。これが現在の豊頃町二宮地区（一部農（の）野牛（やうし）地区にまたがる）になります。移住した人たちは、福島県の旧相馬藩（そうまはん）に住む人達が中心となり、明治３０年（１８９７）１９戸７５人が初めてウシュシュベツ原野に到着しました。その後も入植は続き３９年１６０戸９０１人になりました。移民の農事指導と生活の世話をするため、吉田義重、渡部盛ほか事務員も来て、現在の二宮地区農業構造改善センターのあたりに事務所を建てます。

二宮社長は茂岩（もいわ）市街の住宅から、毎日１０Kmほどある農場まで歩いて通い、移民の指

導に当たりました。道庁は、ここを殖民地に決め、手続きがはかどるよう１戸分５町歩の区画地図をつくっていました。これでは農耕の適、不適がかたよりすぎるため、事務所が別に測量をし１戸毎に川に面した肥沃な土地と、薪炭林につづく丘陵沿いを組み合わせ、できるだけ平均的な土地配分になるよう努めました。１戸５町歩にかわりませんが、内５反歩は薪炭林地に、５反歩が戸毎の宅地、通路、水溝等、あと４町歩を耕地にする計画です。移民が入植する前、数戸の農家がすでに開墾を始めていましたから、その一部の人たちもこの計画に加わりました。

二宮農場　移住資格

① 身体強健にして、三年以上農業に従事した者

② 二十歳以上の男子で家族を有し、二名以上の労働力がある者

③ 本人家族に犯罪前科のない者

④ 一人で十五円以上の携帯金のある者（四歳以上）

⑤ 渡航旅費、荷物運搬費とも自弁できる者

Ｑ３　興復社（こうふくしゃ）の開墾と経営は どう行われたか？

A

これが興復社牛首別農場です。３０年から３４年に入植した家は６年間で、３５年入植は５年、３６年入植は４年で４町歩の原野を開墾し耕地にする約束ですから、明治３９年（１９０６）末に農場はひと区切り、この間に農耕地６４０町歩を開墾し各自宅を建て、道路２２カ所６，９５１間、橋梁（きょうりょう）６１

カ所１７５間、排水路１６４カ所２万６，６６２間を造りました。その他、当初計画にない牧場の開設に取り組み、２万５，０００間の木柵を築き，各家の馬を放牧し、牡馬２２９頭、牝馬１００頭を数えました。そして、栗、落葉松、黒赤松等を植樹し、林地の保全にも意をそそいだのです。

３９年は、作付け面積の約半分が白大豆の畑で（３０５町歩)、黒大豆１８３町歩、小豆１６町歩等、豆作りが主流でした。穀類では黍１０６町歩，玉蜀黍（とうもろこし）１２町歩が目立ちますが、粟（あわ）、稗（ひえ）は僅か、大麦燕麦（おおむぎえんばく）各１町歩ですが、蕎麦（そば）は１６町歩、小麦はごくわずかです。馬鈴薯（ばれいしょ）が２０町歩あり、十勝の他の農場と差はありませんが、各家で２、３頭の馬を飼い、プラウ、ハロー、除草器等西洋農具と組み合わせて作業したことに特色があります。

Ｑ５　興復社（牛首別農場）の農作物の変遷？

A

報徳思想の相互弁用手法にのっとり、移民の生産物を事務所が一括集出荷する共同売買方式は、移住民規約でうたわれながら、明治４２年（１９０９）に行なわれただけで、あとは各組（後述）単位で実施されたにすぎません。それでも事務所による生産財、生活消費財の供給は行なわれ、協同組合の先駆的役割を果たしました。第一次世界大戦の前後、牛首別農場に転機が生じます。１つは畑作から稲作主体への転換です。大正１２年（１９２３）水利組合ができ、丸山からながめる黄金色は「壮観かつ豊かさ」を感じさせましたが（二宮開拓百年記念誌楡）国の減反政策で昭和５９年（１９８４)、二宮の水田は皆無になりました。また、亜麻やビート等、畑作に新たな作物が加わり、更に乳牛の導入による酪農がめばえたことも忘れてはなりません。畑作、稲作、畜産を組み合わせた農業経営により、たび重なる冷害、水害そして不況と戦争統制を乗り切ったのです。

Ｑ６　興復社の人々のくらしはどのように？

A1　「勤 労」に徹する

だれでも希望すれば移民に加えてもらえたわけではありません。３年以上農業経験ある家族もちで、１５歳以上の働き手が２人はいて、１人分１５円の携帯金を準備した後、渡航旅費は自費です。にもかかわらず牛首別農場を目ざしたのは、自主自立の精神にもとづき一人前の農業技術者としての主体性が認められ、将来自作農として独立できる見通しがあったからでしょう。

この夢を現実にする根元は、「勤労」を重んずることだと信じていましたが、毎日の労働は辛苦の連続でした。日の出とともに出入り口にさげた柝（たく）（拍子木）を打ち、起床をつげて畑に出、日が入ると家に帰り索綯（さくとう）（縄をなう）するのが日課，縄ないのわずかな収入を報徳金として積み立てます。報徳訓は子孫の豊饒（ほうじょう）が自分の勤労にかかっており、衣食住の全てが田畑の勤労から生まれると説いているのです。個人の権利を尊重するとはいっても、家族国家観を乗り越えられたわけではありません。

A2　「分 度」を守る

明治になっても封建遺制が強く、男女差別観が残っていましたが、報徳思想は男女平等の家庭をめざし、夫婦は助け合い和合して子孫の繁栄を願いました。

移住前に結ぶ契約の中に「家計節倹ヲ守リ、有余ヲ生シテ之レヲ儲畜シ、吉凶臨時ノ費ハ勿論，天変凶荒ノ予備ニ充テ、又平素品行ヲ慎ミ、徳義ヲ重ンジ、一家親睦交懇切」にすることの一項目があります。各家庭では家計簿をつけ、飲酒を慎み賭勝負ごとを禁じ、虚礼を廃し無駄な出費をしないよう、細かな気配りをしました。

ケチな生活を強いたのではありません。分限を越えたハデな浪費をやめて収支に計画性をもたせ、家庭行事、結婚、葬式や非常災害に備えて蓄え地域へすすんで寄付（公課）するためでした。こうしたくらしの設計を「分度」と呼び、報徳思想の特徴の一つでもあります。

A3 「推 譲」に生きる

移民は住居が決まると近隣の１０戸ほどで組をつくります。ほぼ入植年順に１５組ができ、１番組から１５番組と呼ばれ、組単位で日常生活から冠婚葬祭、道路橋排水路工事、冷害水害救援活動まで、お互いが助け合い弁用し合って生活することになりますから、組内の意志疎通が大切な条件でした。しかし、隣近所のいざこざ、組内の意見の相異は少なくありません。そこで、組に１人ずつ選ばれた什長の役割が重かったのです。

組の活動は家庭の寄付行為（労働、金銭、物資）によって成り立ちます。これを報徳思想で「推譲」といい、自家のための備蓄（自譲）と分けて、他譲と呼ぶこともあります。今日の国や町に納める税金もその一種にほかなりません。人が集まり社会をつくり、その生活を安定向上させるために、なくてはならない精神であり行為であると考え、人間らしく生きるにも、争いのない社会を築くにも、推譲は欠かすことのできない生活原理でした。

Q７ 牛首別報徳会とは、どのような活動をしたか？

A 組ごとの活動は興復社事務所によって統括されますが、これと表裏の関係をなす移住者による自主的な住民組織が明治３５年（１９０２）にできました。

それが、法人組織にかわって現在まで続く牛首別報徳会です。目的は報徳思想を農場内外にひろめ、自らそれを遵守し永安を計り、報徳金（土台金、善種金、加入金，元恕金）を推譲して、災害病難の救助、道路橋排水路修復、勧業奨励、力業篤行表彰等を行うのです。たとえば火災にあった家には、組内の家から１戸稲黍半俵、組外は２０銭を、疾病で農作業のできない家には農繁期に労働奉仕を、大水害にあっては救援金品の推譲を続けました（牛首別報徳会６０年史）。

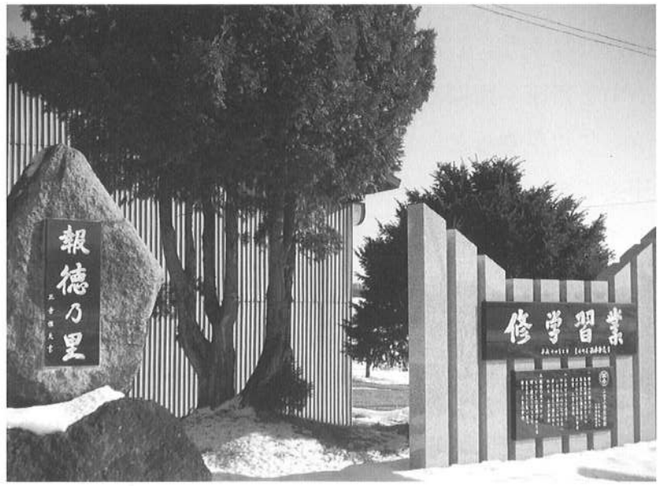
無利息金貸付というユニークな融資制度もありました。それにもかかわらず、４２戸の後継移住者が記録されていますから、その数だけ農場を去った人がいたことになります。

農場事務所による経営は、昭和６年（１９３１）に完了しましたが、その後も報徳会は教育、保育、敬老、女性活動等への推譲を続けています（報徳百年）。

農場の成功は移住者が主体的につくり運営した報徳会の積極的な活動なくして、語ることはできません。

Q８ 心田の開発と地域の創造はどのようになされたか？

A1 「いもこじ常会」による



旧、二宮小学校の庭にある記念碑

豊頃町内の茂岩、豊頃両小学校庭に、二宮尊徳が子どもの頃、柴を背負い本を読む像が建ち、教育の大切さを語っています。　農場では開設後、さっそく子どもの初等教育を始めるべく準備をすすめ、３１年事務所員自宅に寺小屋式の教室を開き、それを３３年事務所に移し、３４年専任教員を招いて公立の牛首別簡易教育所の設置にこぎつけました。　この学校が平成１４年１００周年を迎えて閉校するまで続きました（修学習業）。

父母が子どもの教育に熱心だったばかりか、父母も毎月２０日の午後、学習会に参加し、二宮尊親の話を聞き、営農知識を語り合う等、今日の生涯学習活動を続けたのです。これをいもこじ常会と呼んだりしましたが、参加者がお互い意見を交流し、知識をひろめ、考えを深め合うことから呼ばれた名です。報徳思想は田畑の開墾と同じく心の開墾の必要性をかかげましたが、牛首別の「いもこじ」はこれをみごとに稔らせました。

A2　「心を寄せ合う場」として

辛い時も嬉しい時も、心の拠り所は神であり仏です。各家や組が集まり故郷の氏神や馬頭観世音、地神、蒼殿神、稲荷神社を祀り供養しました。それでも農場の成功を願う移民は心を一つにして祈り祀る神仏がほしかったのでしょう。二宮尊徳を祭神にする報徳二宮神社が栃木県今市町に鎮座すると、その社殿上棟式であった明治３０年１１月１４日、牛首別の丸山に遥拝所の標木を建立、大正６年に社殿を建築し、同９年今市より分霊を迎えここにも報徳二宮神社が誕生しました。さらに大正１１年尊親が死去すると、分骨を乞うて霊場を事務所敷地内に築立神社とともに農場象徴の地になるのです（報徳百年）。

二宮神社の鳥居

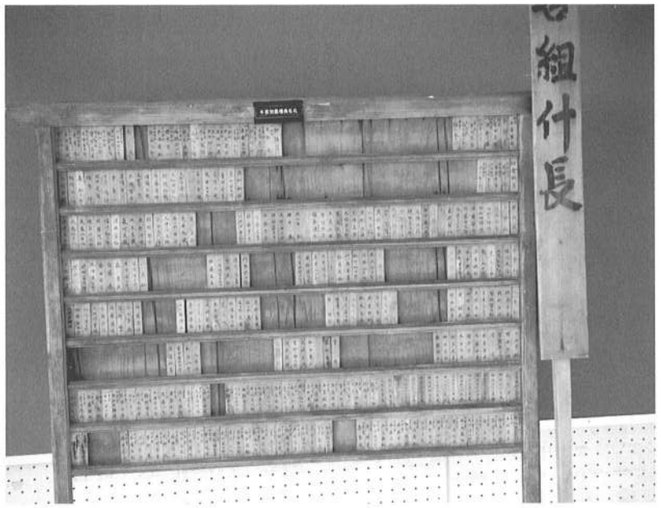
高い丘にある二宮神社社殿

４月８日移民紀念日、７月２９日探検記念日、１１月１４日（現在は９月第３日曜日）を二宮神社祭にきめ、この日は国の祝祭日と同じく農作業を休み、家族ともども物の豊饒と家内安全を祈り祭りを楽しみ移民の協同発展を誓ったのです。

Q９　自治による村づくりは、どのように進められたか？

A1　什長（じゅうちょう）会議と自治機能

報徳思想は個人を尊び自治社会の構築をめざしましたが、牛首別はこれをどのようにすすめたのでしょう。



什長の看板と農場名札

農場経営の権限は興復社にありますが、重要案件は社からの諮問による什長会議の決議を経て実行に移されました。そのことは、「什長ノ命免ハ本社長之レヲ行フ」（移住民規則）と決まつていましたが、毎年末いもこじ常会で記名投票により選ばれた力農篤行者の内、組内の信頼の厚い人を当てたので、什長会議の自治機能は高かったと言えます。

こうした実績を基に村づくりに積極的に参加します。報徳会の法人化に際し「地方自治ノ改善発達ノ援助」をうたっていることからも、それがわかります。明治３９年豊頃村は初めて自治体として認められ村会を開設しましたが、８議員中、農場から武野　侃（１番）、井村宗吾（６番）、原　良助（１番）、日下伊三郎（８番組）の４人が当選しました。自治活動に積極的に参画することが、以徳報徳、富国安民という大きな目標につながると確信していたのでしょう。

A2　報徳思想のひろまり

牛首別農場の指導者二宮尊親は、明治３８年２月２２日東京の学士会事務所で講演をしました。そこに内務省の局長や書記官、農商務省の局長、法制局参事、文部省の秘書官をはじめ道庁岡崎文吉、家庭学校長留岡幸助、東京出獄人保護事業主管　原　胤昭等が出席しました。彼らは尊親から何を学ぼうとしたのでしょう。

まず、十勝で成功した農業技術でしょうが、もっと知りたかったのは町村の財政安定策でした。さらに勤労・分度・推譲による地方改良運動の可能性をさぐり、たくさんある氏神を合祀し、国民統合政策を進める拠り所を牛首別の経験に求めたのです。

現、二宮地区農業構造改善センター

日本は今、国と地方の関係を組換えようと悩んでいます。隣の中国は農村の停滞と市場経済導入によるアンバランスに直面し道徳と経済を至誠の一つに貫くことを以って道とする報徳思想に強い関心を払っています。合併町村が新自治体綱領を樹立しなければならない今だからこそ、牛首別農場の建設と村の自治発達に知恵と力を注いだ先人の生き方に学ぶことが多いはずです。

二宮報徳館となった旧二宮小学校

Q 10 「依田勉三」・「関　寛斎」との交流は?

○　依田勉三との交流

明治２９年７月、移住地の調査に来た二宮尊親一行５人は、依田勉三（晩成社）を訪問している。訪問を受けた依田勉三は、慶応義塾大学に在学中に、福沢諭吉から二宮尊徳について聞き知り、郷里伊豆も報徳の影響の多いところであったので、この来訪を非常に喜び、夜を徹して語り合ったと言われている。

その後、北海道開拓については二宮尊親を尋ねるようにとの勧めもあり、明治３０年５月には、晩成社の渡辺勝と幹部が二宮を訪れ、自分たちの入植当時の苦労も同じであったことを話して激励している。明治３５年頃から、報徳の考えに賛同していた依田勉三は、大津の事業所への往来の都度、尊親宅に立ち寄り、あるいは一泊して交友を深めていたといわれている。その証拠として、二宮神社の創建にあたり、晩成社の依田勉三は「一金、拾円也」の寄付をし記帳した記録が残されている。

○　関　寛斎との交流

二宮尊徳を信奉していた寛斎は、明治３７年７月、豊頃町に二宮尊親をたずねた。この訪問で遺訓（二宮農場の成功）を見聞して一層感動し、尊親との親交を深め、１０月には再び二宮農場を訪れている。翌年明治３８年、開拓の方針を学び自作農を育てる目的で積善社を結成し、陸別斗満で理想の農村づくりにとりかかっている。

五.　報徳のおしえを　学ぶガイド

Q１　『報徳のおしえ』研究のねらいは何か？

A

高度経済成長の終焉とバブル経済の崩壊、長引く不況に銀行・企業の倒産が続き、今日の市町村を取り巻く環境は、今だ景気の低迷や雇用の悪化、財政の危機的状況など厳しい状況が続いている。加えて社会的モラルの低下など環境・教育についても、今早急の課題が問われている。

こうした現在の状況は、丁度、二宮尊徳が生きた江戸時代の末期、開国を迫る外国の圧力や農村の困窮、民衆の心の荒廃といった当時の社会現象に類似していると思われ、この時に当たり至誠・勤労・分度・推譲の四つの報徳精神を説いて逼迫した藩の財政や荒廃した農村の人的・物的復興に顕著な成果を上げた報徳仕法に学ぶ意義は誠に大きいと考える。

各市町村の自治体では、自主・自立の立場から市町村合併問題や行財政改革の見直しなどに直面して、まさに改革というより再構築が求められている。（全国報徳サミット宣言より）

豊頃町教育研究所生涯学習部会も、これまでの「心田塾構想に基づく生涯学習の町づくり」を継承し、地方分権が更に進展する中で「自助・互助、公助あふれる豊かな町づくり、人づくり」の方策を「報徳のおしえ」の具現化を通し追及していきたい。

Q２　『報徳のおしえ』今に通じる（生きる）ところは？

A１

言葉（理屈）より、行動（実践）を

……「鶏晨回邑」（けいしんかいゆう）
率先垂範の指導（リーダ）理論

報徳のおしえは、「江戸時代の古くさい思想」「道徳主義で上からの押し付けの道徳」で、現代にそぐわないとみられがちだが、決してしてそうではない。尊徳は弟子達に「豆」と書いた紙を馬に見せ、馬がそれを食べない事から、言葉よりも何よりも「実践することの重要性」を説いたと言われている。

また、栃木県桜町の財政を立て直すことを命じられた尊徳は、藩の役人（武士）となってからでも言葉だけの上から指示・命令だけ

豊頃町役場前の二宮尊徳像

で農民を説得せず、「道というものは、上が自ら行なうのでないと下は従わぬ」と言う考えで実践した。・・・一番鶏が鳴きだす頃に早起きして、ぐるぐる村を見回る現場主義（行動主義）の立場を貫き、農民の心をつかんだ。いま、豊頃町役場前に立っている尊徳像（前頁の写真の鶏鳴廻村像）はその姿を示していると言われている。

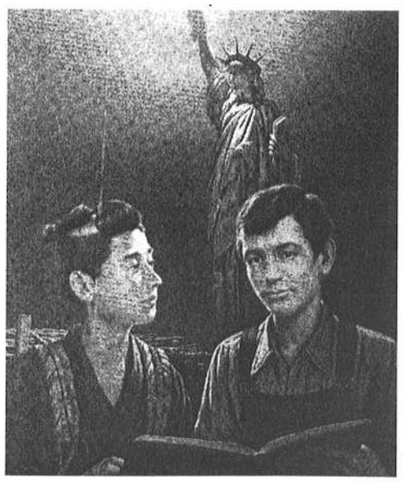
A2 マネジメント論に似た「芋こじ」

…… グループ　ダィナミックス
世界に通じる　民主主義

二宮尊徳の一円札

報徳のおしえに基づく地域づくりは、江戸時代（封建社会）という背景もあって「 武士中心 」の「 上からの組織論」とみられがちであるが、決してそうではなかった。尊徳の生いたちや業績からもわかるように、彼は常に農民の幸せを第一に考え農民の発想で何事も貫かれた生き方をしている。

その証拠の一つ、戦後まもなくＧＨＱが認めた日本銀行から発行されたところの「二宮尊徳の一円札」である。戦前生まれの方は見覚えがあるはずである。


北海道教育大学にあるリンカーンと金治郎の絵

二つ目は、アメリカのＡ・Ｅ・マーチン氏が北海道教育大学に寄贈した「リンカーン少年と金次郎の絵」である。たいまつをかざした自由の女神を背景に、二宮金治郎とリンカーンの二人の少年が一冊の本を読んでいる。なぜ、この絵が生まれたのでしょう。かって連合国総司令官マッカーサー元帥のもとで活躍した新聞課長インボーデン少佐は「二宮尊徳こそは、近世日本の生んだ最大の民主主義者で、私の観るところでは、世界の民主主義の英雄・偉人と比べても、いささかのひけをとらない大人物である。」と述べている。二宮尊徳は、「いもこじ」によって住民・農民の考えを尊重し、地域づくりに住民の全員を参加させ、協議させる報徳仕法（経済活動）の実践で成果を上げた。

この手法は、豊頃町二宮地区の開拓に入植した孫の二宮尊親の地域づくりにも継続されている。この「芋こじ」は、アメリカの先進的なリーダーシップ論のマネジメント論（グループダイナミクス）にもひけをとらぬものであり「民衆を上手に相互啓発と衆知結集をはかる手法」だという学者もいるほどで、二宮尊徳が日本の民主的人物として国際的に評価されていたことがわかる。

A3 それぞれのよさを認める

……「男女共同参画」に通じる
「男女同尊」の考え

尊徳は桜町仕法の行き詰まりから成田山にこもっての断食修業を試み、ここで「一円融合」という独自の考え方を生み出した。 そこで生み出した考え方は、［万象具徳］・・・どんな物にも徳がありどんな人にも徳があり、すべての物や人に備わるよさ、取り柄、持ち味を生かすことを説いている。尊徳は当時の男尊女卑の考えも強く否定し、男がなければ女もなく、女がなければ男もなく、男女が相和して家庭は存在し社会が成り立つことを一円融合の立場から説き、身分差別の厳しい封建社会の中で、全ての人が幸福に暮らせる社会を主張している。

A4 働くことや　労働者を大切にする

…… 農民いじめに抵抗
「農本主義」

江戸時代ほど、身分制度（士・農・工・商）がはっきりとしていた時代はない。そんな社会状況のなかで、尊徳は「農は本なり。田徳がすべての基本である」と述べている。

「田畑開けて五穀熟し食物が足りて人道が定まる。人道定まって父子、兄弟、夫婦、朋友の四倫の道」と言い、あえて君臣の道を加えて「五倫」とは言っていない。
これは、「二宮翁夜話」の中で耕作、農業をなして五穀をつくり出す者を守護し、横暴な者をこらしめ、民百姓が平和に安心して暮らせるように守るのが「武門の道」と話し、はじめて「武門の道」を位置付けた民主的な思想である。

従って、尊徳は桜町の財政再建をまかされてすぐ、農民を苦しめてきた斗枡の改革を認めさせたり上に立つ領主にも節約（分度）を求め、農民に年貢の搾取、重税の取りすぎをやめ領民に大きく譲る仁政を説いている。

Q3 「報徳のおしえ」が、今の世に送るメッセージは？

A1 今の世の豊かさへの警鐘

現代の私達のくらしや今の人々の生き方には、どちらかと言うと～「少しでも楽をしたい」、「今を楽しければよい」「自分さえよければよい」という考えが多くなりつつある。

あ → あんしん(安定志向)
ら → 楽をしたい
ま → 間(なまけ)
お → おもしろく　おかしく
ほ → 本物(ブランド志向)
ほ → 本人(利己)主義

尊徳の体験から生み出したことばに、「積小為大」というのがある。この意味は、小さな毎日の積み重ね、努力があって初めて大きな事業が完成するということである。

どんな時代であっても、人は自らの意思に基づき学んだり、いきいきと進んで働く（勤労）ことが大切であり、社会のためにも求められている不変の真理である。「報徳訓」に書かれているが、自分の置かれた環境を考え自己をわきまえ、自分の生存に感謝しつつ、まじめにコツコツと働くこと、明日のため社会のために生きることを求めている。

A2　今こそ、「分度」が問われている

……「地球資源の枯渇」
「財政破綻」への警鐘

大量生産、大量消費の現代の経済生活は、自分の欲を抑え外聞にとらわれない勇気と、己に克つ生き方が難しい時代になっている。　二宮尊徳は経済と道徳の両立、「収入を計って、支出を制限する」生き方、即ち「分度の確立」が最も大切であると力説している。又、成熟社会の生活（豊かな食生活、便利で快適な生活）は、より大量により儲けを求めるため、有限な地球資源の減少、枯渇の危機をまねいている。環境問題も現代の大きな課題であり、有限の資源を大切にし、子孫に借りを残さぬよう「分度」を持って暮らす生き方が問われている。

いま、企業や銀行の経営体質が問われ、国や地方自治体の行政改革・財政再建が問われている。「分度・推譲立県」を旗印とする栃木の取り組みや、生涯学習宣言の町づくりを進める静岡の掛川市の取り組みは報徳精神の具現化を物語るものである。又、年金や社会保障（老人介護）も、元を正せば分度・推譲の考え方に行き着くことである。

A3　今こそ、対立、抗争から「共生」へ　……「一円融合」

今、人間社会にはさまざまな対立・抗争があり、時には一方が他方を権力や武力の圧力で問題を解決することが多いと思われる。これから、２１世紀の生き方は、自分を大切にしながらも他者の存在をも認めて、ともに生かされる「共生」の考えに立つことが求められている。報徳思想の「分度」「推譲」の考えを突き詰めれば、現代社会が最も大切にしていかねばならない「共生」の考えに通じると思われる。なぜなら、社会福祉、社会保障（年金・障害者、老人介護）問題、更にはゴミや資源等とかかわる環境問題があるからである。

また、今年は度重なる台風による被害や大きな災害に見舞われたが、こうした不測の事態に備える生き方は、「分度」「推譲」を基盤とする報徳の教えに学ぶことが大きいと思われる。

Q３　尊徳の「心田（しんでん）の開発（かいはつ）」とは？

A

二宮尊徳は新田の開拓には、まずもって農民の労働意欲（心の田）を耕すことが先決であると考えていた。尊徳の心田を耕す方法は、先にも触れたように農家一戸ごとに訪問する「鶏鳴廻村」による相談事業であり、村人全員を集めて行う集会「芋こじ」であった。

町や村の再建復興に当たって、現代風に言うなら、「新田開発」即ち、道路や橋、水路を作り排水工事を施し荒地を開いて「新しい土地を開発する」というハード面を指している。

それに対して「心田開発」とは、人々の心の田の荒廃（つまり物を大切にしない、物の徳を（長所、とりえ）に感謝しない、勤労に背を向ける）を改め、人々の心の田を深く耕し美田にすることである。即ち、村人のやる気（自主性）や目的意識を開発するというソフト面の育成に力を注いでいるといえよう。報徳の教えでは、まず心の荒廃を耕し、次に田畑の荒地を開くことを重視している。そして、一人の人間の「心の荒れ」を開拓することができれば、「土地の荒れ」ているのが何万町歩あろうとも恐れることはないと教えている。次に、「芋こじ」による「心田開発」は今の時代の生涯学習にも通じるもので、どのような方法、特色があったか拾い出してみると、

○　人のよいところを探し、ほめる、賞する。

・人には必ずよいところ（徳）があり意識的にその人の良さを探しほめる。

・村づくり等では作為的に行い意欲を高め、まちがいのある者には諭し気づかせる。

○　自らの実践（体験）を通して、学ぶことを重視する。

・自分で行動し体験して学ぶことを大切にする。

・知識とは、体験、実践してこそ学んだと言える。

・他人の話を聞く、書物を読むだけではなく、その中にこめられている真理を見抜き、学び続ける。

○　集団で磨き、学びあうことを重視する。

・みんなが集い勉強しあったり、お互いのよさを見つけ広げる。

・指導する人の押し付けをせず、（いもこじ）で民主的に解決する。

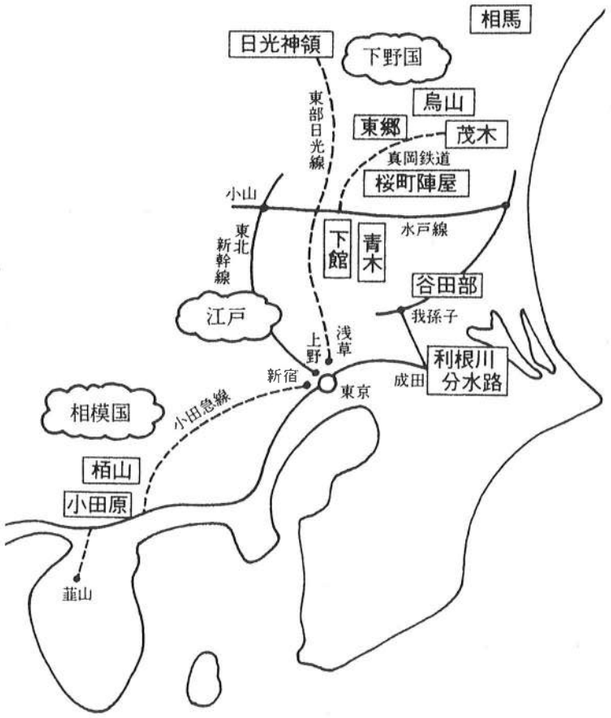
Ｑ４　二宮尊徳ゆかりの地とは？

A　二宮尊徳翁ゆかりの地とは（全国報徳研究市町村協議会　加盟市町村）

北海道（豊頃町）
福島県（相馬市　南相馬市［原町市・鹿島町・小高町が合併］　大熊町　浪江町　飯館村）
茨城県（筑西市［下館市・開城町・明野町・協和町が合併］　桜川市）
栃木県（日光市［今市市・日光市・足尾町・藤原町・栗山村が合併］）
（鹿沼市　真岡市　二宮市　茂木町　鳥山町）
千葉県（成田市）
神奈川県（小田原市　秦野市　南足柄市　大井町）
静岡県（掛川市　御殿場市　天竜市　伊豆市　静岡市）
三重県（大台町［宮川村・大台町が合併］）

◎　ここに掲げた市町村を含め、全国６００を超える地域の復興にかかわっている。

二宮金次郎　活躍の舞台



Ｑ５　いま、受け継がれている「報徳サミット」とは

A　『全国報徳サミット』開催地の経緯は

二宮尊徳生誕２００年を記念し、昭和６３年に神奈川県小田原市に尊徳ゆかりの地の市町村長や関係者が集まり、「報徳の教えに学び町づくり人づくりに生かす」ことを目的とした「報徳サミット」を開催している。

全国報徳研究市町村協議会は、北は北海道豊頃町から南は三重県大台町（平成１８年宮川村と合併）まで、２２市町村が加盟している。

ちなみに、平成１９年度は、茨城県筑西市（下館市）で行われた。

第①回　報徳サミット開催地（神奈川県　小田原市）……　尊徳の生誕の地
第②回　報徳サミット開催地（静岡県　掛川市）……　報徳の訓えから生涯学習宣言へ
第③回　報徳サミット開催地（栃木県　今市市）……　日光仕法と尊徳終焉の地
第④回　報徳サミット開催地（千葉県　成田市）……　尊徳開眼の地（一円融合）
第⑤回　報徳サミット開催地（福島県　相馬市）……　尊徳の弟子富田高慶の仕法
第⑥回　報徳サミット開催地（栃木県　二宮町）……　尊徳の報徳仕法実践の地
第⑦回　報徳サミット開催地（静岡県　御殿場市）……　飢餓を救った仕法
第⑧回　報徳サミット開催地（三重県　宮川村）……　報徳仕法に学んだ地
第⑨回　報徳サミット開催地（栃木県　茂木町）……　飢餓を救った仕法
第⑩回　報徳サミット開催地（福島県　原町市）……　尊徳の弟子富田高慶の仕法
第⑪回　報徳サミット開催地（栃木県　真岡市）……　幕府の役人として活躍した地
第⑫回　報徳サミット開催地（神奈川県　小田原市）……　二回目の開催
第⑬回　報徳サミット開催地（茨城県　筑西市）……　合併してからの開催地

A　『国際二宮尊徳思想学会』とは

いま、中国はめざましい経済発展を遂げて、国民の暮らしは改善され豊かになってきた。しかし、その裏には経済格差が拡大し道徳性の乱れも指摘され、「経済」と「道徳」の両立が叫ばれている。

こうした中で、日本の二宮尊徳の考え方に共鳴する学者たちが集まり、２００２年、中国北京大学で、「二宮尊徳思想国際シンポジュウム」が開催された。２００３年には小田原市で、２００６年には中国大連で、そして上海でフォーラムが開催され、報徳思想は世界的な広がりをみせている。

六.　生涯学習部会研究のまとめ

部　　長　**笠　松　信　一**（生涯学習アドバイザー）
部長代行　**宮　村　栄　治**（豊頃中学校 教　頭）
部　　員　**山　口　浩　司**（茂　岩　学識経験者）
　　斉　藤　義　昭（大　津　学識経験者）
　　種　川　祐　章（礼文内　学識経験者）

○　**研究主題**　**「報徳の教えに基づき、生涯にわたって学ぶ意欲をもち、心豊かで社会の変化に主体的に対応できる人間性を求めて」**

～家庭、学校、地域社会の融合を深め「いつでも、どこでも、だれでも、」が学べる生涯学習の環境づくりに努め、主体的に学ぶ意欲と態度の充実を目指して～

○　**研究課題**　**「報徳」から学ぶ家庭・学校・地域社会のあり方**

○　**研究動機**

豊頃町は豊かな自然とたくましい開拓精神(報徳のおしえ)を町民憲章に掲げて町づくりを進め、今日まで力強く発展してきました。

しかしながら、最近は町村合併に象徴されるように、国、地方を問わず財政の悪化、少子高齢化や失業、ニート等、社会不安の増大や労働意欲の減退が叫ばれ、私たち町民を取り巻く環境も例外ではなく家庭、学校、地域社会それぞれに厳しい課題が山積しています。当研究所生涯学習部会ではこうした現状をふまえ、更に町民と行政が一体となって自立した協働の町づくりに向かうには、今こそ報徳のおしえに学び、町民一人ひとりが「心田の開発」をめざす生涯学習の環境づくりをすすめることが肝要である。

○　**研究計画**

第１年次　①　生涯学習部会「研究課題」についての検討
　　②　「報徳のおしえ」についての基礎学習を進める
　　・豊頃町教育委員会発行「いまこそ報徳」の学習会
　　・郷土資料調査員　君　尹彦氏の講話「報徳思想について」
　　・町民大学講座「いまこそ報徳」・北海道報徳情報誌の学習
　　③　「報徳のおしえ」の具現化（実践への指標づくり）
第２年次　①　報徳に関する家庭教育アンケート調査の実施
　　②　学校教育部会と連携した授業研究（豊頃小・茂岩小）
第３年次　①　「報徳のおしえ」のリーフレットづくり

(1) **研究方法** 「報徳の教え研究」とその具現化(実践への指標づくり)

① 「報徳のおしえ」の最も中核となる考えは何かを明らかにする。
- 四綱領(至誠・勤労・分度・推譲)「積小為大」「一円融合」
- 至誠を根本理念とし、実践内容を勤労・分度・推譲を**縦軸**とする。

② 報徳の実践の場として、『家庭』『学校』『地域』を**横軸**に配置し、課題を洗いだす。
- いま、家庭ではどんなことが問題であり、課題となっているか。
- いま、学校ではどんなことが問題であり、課題となっているか。
- いま、地域社会ではどんな問題があり、課題となっているか。

③ 縦軸の四綱領を今ふうの分かりやすい平易な表現にし、横軸の家庭学校・地域に分けて、現在の課題と対置して表にまとめる。

	家　庭	学　校	地　域
至　誠	「あかるく　ひたむきに」		
勤　労 いきいきと 小さな積み上げを			
分　度 それぞれのよさ 自らを見つめて			
推　譲 ゆずる心で 共に生きる			

★「至誠」については、四項領を統括する概念とし家庭・学校・地域にまたがる考え方をやさしく示すこととする。

(2) **家庭教育(報徳)に関する実態・意識調査**
- 豊頃町内の全小中学校保護者(4年生以上)を対象にアンケート

(3) **学校教育部会と連携し「報徳のおしえを学ぶ授業研究**
- 豊頃小学校4年生社会科「原野を開きたがやす」　1/2
- 茂岩小学校4年生社会科「心の田をたがやす(芋こじ)」　2/2

(4) **対置表の作成と報徳のおしえの「リーフレット」づくり**

○リーフレットの背景　(四綱領と現代の課題)

報徳「四綱領」	今の「生活課題」
至　誠 ひたむきに まごころを	**【まごころ不足時代】** あ　安定志向 ら　楽をしたい ま　間(なまけ)がほしい お　おもしろく　おかしく ほ　本物(ブランド)志向 ほ　本人(利己)主義
勤　労 いきいき 小さな積み上げを	**【労働の軽視・労働意欲減退】** ・お手伝いしない子　させない親 ・親の働く姿が見ない　見えない ・労働の質の変化 鍬からデスクへ ・ニート、フリーターの増加 ・ひきこもり　不登校の増加
分　度 それぞれのよさ 自らを見つめて	**【大量消費浪費時代】** **【環境破壊・汚染時代】** ・いじめ　自殺の増加(自尊感情不足) ・耐性(がまん)、協調性不足 ・見栄や外聞にとらわれた生活 ・流行、高価なものを求める生活 ・ローンやカード(借金)を平気で
推　譲 ゆずる心で ともに生きる	**【公共心・社会性の不足】** ・家族やお年寄りへの思いやりの不足 ・地域、社会とのかかわりの希薄化 ・税金・年金・社会保障への無関心 ・災害や不測の事態に無関心 ・少子、高齢化の進行 (パラサイト　シングル)

報徳の教え

［趣旨］
とよころ町の人々が、「報徳の教え」を、3つの場（家庭・学校・地域）で生かし、連携し「人づくり」と「町づくり」に取り組むため、四綱領をより簡潔で、よりわかりやすくしたものがこの図表です。

至誠
あかるく　ひたむきに

勤労
いきいき
小さな積み上げを

家庭　自分のことは自分で
読書のすすめ
学校　楽しく学び　生きる力を
地域　夢をもち学び続ける喜び
はたらく喜び

分度
それぞれの良さ
自己をみつめて

家庭　耐える心　お金や物を大切に
学校　友のよさ　かかわりを大切に
地域　見栄を廃し　備えの心で

推譲
ゆずる心で
共に生きる

家庭　感謝・あいさつのすすめ
学校　認め合い思いやりの心
地域　自然を守り共に汗する

3つの場で耕そうよ

豊頃町教育委員会

「報徳のおしえ」を「家庭」・「学校」・「地域」で

豊頃町教育研究所生涯学習部

	「家庭」では	「学校」では	「地域」では
至誠 ひたむきな まごころ	私たちは、今を充実させ明るい未来を発展させるために、親切にして人をあざむかない「まごころ」と、強い目的意識(モチベーション)を持って、生き生きと行動したいすものです。・・・・そのためには、私たちを取り巻く全て（天・地・人）のものへの「感謝」と、家庭・学校・地域における自らの立場や仕事に誇りをもち、報徳の教えに学びながら「心の田」を耕すことが求められています。		
勤労 いきいき 小さな積み上げを	**○　自分のことは自分で行う等、基本的生活習慣を身につけ、家族の一員としての自覚を持ち、お手伝いができる** **○　両親や近隣の人々との触れ合いを大切にし、それぞれの働く姿に感動したり、感謝の気持ちを持って生活ができる** 子どもは家庭で失業？（・お手伝いしない子　・お手伝いさせない親） 勤労のモデル不足？（・父親の職場や働く姿が見えない？） （・不登校　・ひきこもり　・ニートの出現）	**○　学ぶ喜びを育て、生涯にわたって学び続ける意欲と生きる力（基礎・基本）を身につけることができる** **○　自分の個性・適性を知り、将来への夢を膨らませ、進路選択の力を磨くことができる** **○　毎日の小さな努力の積み上げで、大きな成果を得る事を学ぶ** 知識偏重教育の是正と生きる力の育成 （・学ぶことと働くことの分離？） （・見学、体験学習の重視？　・総合的学習の重視？） （・進路、職業教育の重視？　・道徳教育の重視？）	**○　自らの仕事に生きがいを感じ、意欲と誇りをもって働く事ができる** **○　くらしを高め社会や公共の為に尽くすには、働きながらも学ぶ小さな努力の積み上げが必要であることがわかる** 地域連帯感の希薄化 労働軽視の風潮 **あ** ⇒ 安定志向 **ら** ⇒ 楽をしたい **ま** ⇒ 間（なまけ）がほしい **お** ⇒ おもしろ　おかしく **ほ** ⇒ 本物(ブランド)志向 **ほ** ⇒ 本人(利己)主義
分度 それぞれのよさ 自分を見つめて	**○　それぞれのよさ、持ち味を見つけ、それを生かす考えに立ち自然や物を大切にする心構えと行動ができる** **○　自らをわきまえ、必要以上にお金や物を欲しがったりムダ使いをしない** **○　家庭や地域の中で、自らの立場を理解し共に考えたり協調して行動（助け合う）することができる** 豊かな物の時代（・物を大切に、節約するしつけの不足？） 少子高齢化時代（・自己中心的で耐える心、がまんする心の不足？） 家庭における教育力低下（しつけ、道徳のモデル不足？）	**○　集団生活における自分の立場と存在を理解し、きまりを守り自己を律することができる** **○　郷土の自然や文化を大切にし、感謝の心を持って生活することができる** 自己理解と耐性を育てる教育 社会性を育てる道徳教育 自然保護と資源を大切にする環境教育	**○　自分のため、みんなのために自然を守り、公共の施設を大切にすることができる** **○　自己の収入や立場を知り、ムダな浪費や見栄を廃した消費や社会生活ができる** **○　自然災害や不測の事態に対しての、備えや心構えをもつことができる** 豊で物の豊富な時代にあって流行を追い、高価な物を欲しがり、平気で借金（ローン）をする傾向 見栄や外聞にとらわれない勇気や耐性の欠如
推譲 ゆずる心で 共に生きる	**○　自分の家族や地域のお年寄りへの気づかい、おもいやりの心を持って接することができる** **○　自分と異なるものに理解を深めると同時に、みんなと協力することができる** 地域社会とつながる家庭教育？（・家族へのおもいやり？） （・家庭における役割分担？） （・地域行事への理解と参加？） （・奉仕する心の欠如？）	**○　お友達のよさと違いを認め、かかわりを大切にして、楽しく学校生活ができる** **○　自分のために働くだけでなく、家族や地域社会のためにも働いたり、奉仕（ボランティア）活動ができる** 生徒指導の機能を生かした教育の重視 国際理解や福祉教育の重視　（・異文化理解、広い心の育成？） 連帯感や社会性を育てる教育（・いじめ、不登校、暴力の追放？）	**○　働いて得た収入は自分のためだけでなく、自分や家族の将来、地域や社会のためにと考えることができる** **○　被災者や社会的弱者への関心といたわり、広い心（公共心）を持つことができる** 自主・自立の精神と自治意識の低下 税金・年金・社会保障への無関心（自助・公助） 台風、地震等の自然災害への関心・共生の心の欠如

報徳に関するアンケート

豊頃町教育研究所
（平成17年９月調査）

問１．「報徳」という言葉を知っていますか

回答合計（２１０）

① よく見たり聞いたりし、意味はわかっている	１５％	(54.0)
② ときどき見たり聞いたり意味はよくわからない	２８％	(100.8)
③ ほとんど見たり聞いたりせず意味もわからない	４％	(14.4)
④ 町民憲章や銅像の前にかかれよく知っている	１０％	(36.0)
⑤ 町民憲章や銅像に書かれているが、意味はわからない	２０％	(72.0)
⑥ 学校や研修会等で学んだのでよく知っている	８％	(28.8)
⑦ 学校や研修会で学んだ・・・がよくわからない	６％	(21.6)
⑧ 学校や研修会で学んだことなくよくわからない	９％	(32.4)

問２．報徳の教えに対し、どのように感じていますか。

回答合計（１８６）

① 報徳の教えは今の時代にこそ大切	１９％	(68.4)
② 報徳は、古い考えで今の時代に合わない	２％	(7.2)
③ あうところと合わないところがある	１５％	(54.0)
④ 町民憲章にあり、町民の暮らしに生かされ	５％	(18.0)
⑤ 町民の暮らしに生かされていない	１４％	(50.4)
⑥ 報徳の教えは、もっと学校や地域で学ぶ必要がある	２３％	(82.8)
⑦ むずかしいのでわかりやすく教えてほしい	１６％	(57.6)
⑧ 全く関心がなく、わからない	６％	(21.6)

問3．金治郎像を知っていますか

回答合計（１０６）

① 知ってい	１０２	９６％	(345.6)
② 知らない	４	４％	(14.4)

問4．あなたは、二宮金治郎の銅像を見て、どのように受け止めておられますか。イメージや感想を、その他自由にお書きください。

① 昔は、ほとんどの学校にあったように思います。あたり前のようにあったので、別に悪いイメージはありませんが、今の子供たちが金次郎の事をどれだけ知っていて、理解しているかは疑問。報徳の教えを広めたいのであれば、もっと積極的に活動しなければいけないと思います。（教育委員会、学校、ＰＴＡ等）

② 私の小学校(町外)にもありました。えらい人というむイメージがあります。

③ 生活さえままならない中で、勉学にいそしんだ金次郎の銅像をみる度、私たちや子供たちは、なにもかもそろっている中で、勉強できる幸せを感ぜずにはいられません。

④ 「学ぶ」ということは、決して「時間」が無くとも気持ち一つでどのような形であってもできる（学べる）という象徴。時間に「ゆとり」が無いからできない（学べない）ではなくて働きながらでもできるという様なことをうたっている様に思える。

⑤ 自分の通った小学校にもあったなあという程度で、特別な思いはありません。

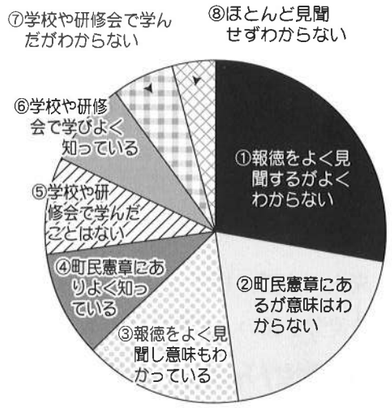
⑥　自ら学ぼうとする気持ちが大切だと思います。
⑦　今の子供たちは当時の生活状況など、理解することができないかと思う。
⑧　いつの時代にも、目標を持ってコツコツ努力することは必要だと思う。
⑨　昔と今を比べても、時代、環境，豊かさ等が違うので、子供にはあまりピンとくるものがないと思うが、昔は貧しさの中で生活、勉強に対しての一生懸命さがあったと思う。今の時代の子供たちは何不自由の無い豊かな生活があたりまえで、感謝するという気持ちが全く無いのだと思う。物を大切にするという気持ちももてないので、動物の命、人の命の尊さがわからないのだと思う。タイムスリップできるなら、二宮金次郎にあって、その時代の大変さを子供たちに実感してもらいたいものだ。
⑩　親世代も子供の頃から身近なものとして存在していた。「一生懸命に努力した人」として教えられそのままに思っていた。今の子供たちはどう思っているのだろう。
⑪　子供は、きちんと働きながら、勉強するようにという教え。家の手伝いもせず勉強だけしていても、人間的に育たないと思う。家族が子供にとってはじめての社会の場だから、家族が力を合わせて家の事を助け合う事ができるのが理想です。
⑫　銅像は作られたイメージと考える。二宮金次郎の思想、行動を解りやすく国民に知らせるべきと思う。今の日本に必要なものと考えます。
⑬　本町においては、本当に大切なものであると思います。報徳の教えをもっと広め、子供たち自身にも学んで欲しいと思っています。
⑭　今の時代に説明しても、理解ができないと思う。
⑮　金次郎のように仕事を手伝いながら勉強に励んでもらいたいものです。金次郎は、本を読む時間があったらその分働けと言われて思うように勉強できなかったと思うので、今の子供たちは時間があるのにしないのはなぜでしょうね。自分もそうだったので、子供にあまり言えませんね。
⑯　勤勉というイメージ。お手伝いをしながらも勉強をしているというイメージ。学ぶという勉強するという姿勢、強い気持ちを持っている。今、現在にはあまり見られない光景であり、そういうふうに子供に伝えるのもむずかしいかなと思います。
⑰　ある道徳教育の象徴として置かれており、子供たちの考えたり、学んだりする一つのとつつかりとして大切なものであると思っています。ただ、これからの道徳教育は世界各国、地球全体としてその行く末が良好な方向へ歩むような、諸々の垣根を越えた普遍的なものが求められていると感じます。
⑱　何年か前、銅像が動く映像（怪談）があり、しばらく子供たちは怖くて・・・今はきっと無関心でしょう。なぜ、二宮金次郎の銅像があるのか、彼と豊頃の関わり、報徳の教えというものを子供たちに伝える必要がある。
⑲　貧しくても知恵を出してよりゆたかなに生活できるように勉強は欠かせない。
そんなイメージでしょうか。ムダづかいはしない、物を大切にする。争いはしない、協力する。
⑳　銅像が立っているのは見るが、それを理解し子供に教えているかどうかはわからないので、教育の場で教えてもよいのではないかと思います。
今の子供は、家の仕事を手伝うということに（サラリーマンは特に）必要にせまられず、少年団活動や塾など昔の生活とは違って、子供の遊びも自然ではなく、作られたおもちゃやゲームなど、コツコツ努力して夢をつかむ事のできる子は何人に一人なんだろうと？・・と思う。私は子供時代を今の時代で生きなくて良かったと思う。
私は子供たちになるべく自分の子供の頃に体験したこと、つらかったことなど、伝えていくつもりです。そして、このストレス社会で、強く生きていけるように、強い子として育てています。

若いお父さんお母さんの
「報徳」に対する関心は？
豊頃町教育研究所生涯学習部会調査

家庭や地域の「教育力の低下」が叫ばれて久しい中、「報徳の町」と言われている豊頃町はどのような現状にあるのだろうか？　豊頃町教育研究所では、町内の小・中学校を通じ小学校４年生以上の子供さんをお持ちの保護者のご協力を得て、下記のような「報徳と家庭教育」に関する意識・実態調査を行いました。（今回はその一部を紹介します）

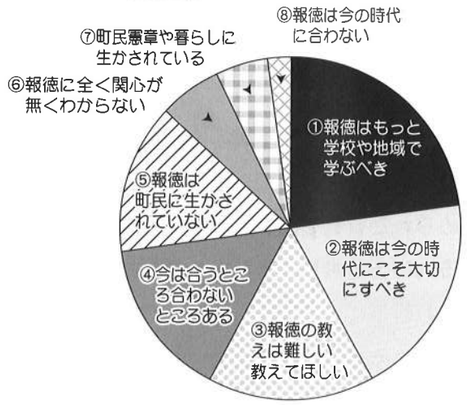
問１　二宮金次郎像について知っていますか。また、その銅像にどのように感じていますか。

回　答　項　目	%
① 見たり聞いたりして知っている	96
② 知らない	4



問２　あなたは「報徳」と言うことばを知っていますか

回　答　項　目	%
① 報徳をよく見聞するがよくわからない	28
② 町民憲章にあるが意味はわからない	20
③ 報徳をよく見聞し意味もわかっている	15
④ 町民憲章にありよく知っている	10
⑤ 学校や研修会で学んだことはない	9
⑥ 学校や研修会で学びよく知っている	8
⑦ 学校や研修会で学んだがわからない	6
⑧ ほとんど見聞せずわからない	4



問３　報徳の教えに対しどのように感じていますか

回　答　項　目	%
① 報徳はもっと学校や地域で学ぶべき	23
② 報徳は今の時代こそ大切にすべき	19
③ 報徳の教えは難しい　教えてほしい	16
④ 今は合うところ　合わないところある	15
⑤ 報徳は町民に生かされていない	14
⑥ 報徳に全く関心が無くわからない	6
⑦ 町民憲章や暮らしに生かされている	5
⑧ 報徳は今の時代に合わない	2

【 分 析 】

問１の結果を見てもわかるように、豊頃の人々は日常的に小学校の校庭にある柴を背負って読書する金次郎像や、役場前の尊徳鶏鳴廻村像は見て知っている。 また、それらの銅像から受けるイメージは、「勤勉」「努力」「実直」の人という好意的な意見を寄せられており、否定的な意見は皆無と言える。しかしながら、豊頃町民は町の行事や各種の会議や研修会等の資料で、町民憲章や報徳の教えに触れることは多いが、問２の回答のように「報徳の中味についてはよくわからない」と、①②⑦⑧合わせて答えている方も58％と結構多いとも言えよう。報徳の教えそのものに対する住民感情としては、「報徳はもっと学校や地域で学ぶべき」が23％、「報徳は今こそ大切にすべきだ」～19％、「報徳の教えは難しいから教えてほしい」～16％と、実に６割にも及ぶ町民が報徳の教えを積極的に学ぶ姿勢を持ち、自分の生活や生き方に生かそうとしていることが伺えたことは、これからの町づくりや生涯学習推進にも励みとなることは確かである。

○ 報徳の授業研究

第四学年　社会科学習指導案

1．単元名　「十勝の夜明け」

2．単元の目標

① 先人の働きに興味を持ち、資料を生かしてその苦労や願いを知ろうとする。

② 先人の働きにより、地域がどのように発展したか具体的に考えることができる。

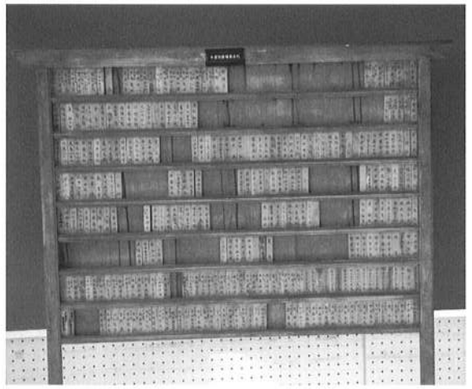
③ 今に残る史跡や資料をめあてを持って調べ、分かったことをメモにまとめたり、考えたことを発表できる。

④ 地域の発展のため尽くした先人の働きによって、地域の人々のくらしが向上してきたことがわかる。

3．単元について

本単元は、先人の生活の様子を知り、人々の生活を向上させるために開拓して田畑をつくったことや、人々の苦労や願い、地域をよりよくしていこうとした思いを理解する単元である。また、そうした歴史の発展に尽くした先人に関心を持ち、実際に史跡や資料館を見学したり、地域の古老の話を聞いたり、資料を活用して、児童にその役割や苦労を考える力を育てたい。

本時では、当時芋こじで実際に使われた「牛首別農場員名札」を提示する。具体物を提示することで、児童は興味や関心を持って学習をすすめていくことができるであろう。「芋こじ」等のまとめられた資料を調べる過程で、児童は書かれている内容を追求し、それをもとに活発な意見交流が行われるにちがいない。視点の変換では、報徳訓にふれる。二宮尊親の教えが、今も豊頃に住む者の心の中で生きていることに気づくであろう。



牛首別農場員名札

4．児童の実態

この学級を受け持って二年になる。学習時間や休み時間にかかわらず、活発な学級である。社会科の学習では、主にグループ活動を中心にパソコンや図書・資料などを使って意欲的に調べ学習をおこなっている。資料活用については、写真からその当時の様子や状況を読み取ることができる。しかし、グラフの読み取りを苦手としている。文章資料は一度読むと、ほとんどの子どもは大まかな内容を読み取ることができる。しかし、複雑な内容や文章の長い資料では理解するのに時間がかかる。

5．単元計画

単元	中単元	小単元	時数	主な学習活動と内容
十勝の夜明け	開拓地のくらし	オリエンテーション	1	十勝を開拓した人たちがいつごろから来て、どんな生活をしていたか調べてまとめる。
	町の発展につくした人々	二宮尊親	2	豊頃町を開拓した人達がいつごろから来て、どんな生活をしていたか調べてまとめる。
		堺　千代吉	2	
	十勝の開拓のはじまり	晩成社の開拓	2	十勝の開拓の始まりの様子や苦労・願いなどについて、調べまとめる。
		晩成社の人々	2	
		開拓の苦労	3	

6．授業の展開

その①　（1/2）

①　二宮尊親「原野を開き　たがやす」

日　時　　平成17年11月28日
児　童　　豊頃小学校４年生
指導者　　榎　波　　孝

○ **授業のねらい**　豊頃町に開拓に入った尊親たち開拓者の苦労を資料を活用して調べその大変さを感じ取ることができる。

○ **本時の課題**　実際に開拓をした人の苦労を考えよう。

○ **授業の流れ**

① 鋸、斧、鍬の実物を見て、触ってみる
（実際に、当時使われた鋸を使い、木を切る体験をする。）

② 開拓の写真を見て、調べる（それぞれパソコンで調べる）

③ 調べたことを発表し交流する。
（開拓はすべて手作業でとても辛く大変な仕事だ理解する）

④ 開拓者は、どうやつて辛い仕事を成し遂げたか考える。

⑤ 次の時間は、『芋こじ』について学習すことを知る。

二宮尊親

○　**授業の反省**

豊頃小四年生、榎波学級7名の子どもたちは、豊頃小のコンピューター教室いっぱいに集まった町内の先生方や研究所，教育委員会、報道関係者等の参観する中で、緊張のなかにものびのび生き生きと学ぶ姿を見せてくれました。パソコンに取り込んだ開拓当時の写真を見て話し合ったり、開拓当時の鍬や大きな鋸を使い実際に木を切る体験を通して原野を開き、たがやすことの大変さを学んでいた。

その②（2/2）

②　二宮尊親「心の田を　たがやす」

日　時　　平成17年11月28日
児　童　　茂岩小学校４年生
指導者　　林　　千登勢

○　**本時の目標**

①　芋こじに関心を持ち、資料を活用して意欲的に調べることができる。

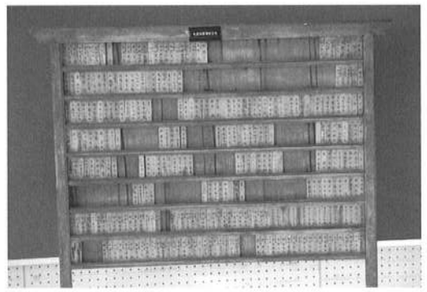
②　二宮尊親や報徳訓を身近に感じ、自分なりの考えを発表することができる。

○　**本時の展開**

○　**授業のねらい**

①　「芋こじ」という言葉に関心を持ち、実物や資料を活用して意欲的に調べる。

②　二宮尊親や報徳訓を身近に感じ、自分なりに考えわ発表することができる。



牛首別農場員の名札

学　習　過　程		学　　習　　活　　動
導入	1．導入	①　これを見て気づくことを発表して下さい。 ・木でできている　・札がはずれそう ・名前がたくさん書かれている ・牛首別農場名札と書かれている ②　今から百年ほど、豊頃町を開拓していた人達は、皆さんと同じように話し合いをしていました。その時の出席・欠席を確かめるために使った「牛首別農場名札」です。 ③　この話し合いには、ある名前がついていました。 出席すること、徳の二つを大切にしました。今日はこの話し合いについて学習します。 「話し合い」（芋こじ）を調べよう

学　習　過　程		学　　習　　活　　動
課題の追求	2．課題設定	④　この話し合いの名前を知っている人はいますか
	3．課題に対する予想と追求	⑤　開拓で忙しいのに、全員出席したと思いますか ⑥　「徳」を大切にするとは、どんなことかなみなさんにこれから資料を配ります。調べて下さい。 資料１（芋こじ）／資料２（話し合いと出席）／資料３（知識よりも徳）
	4．小交流	⑧　資料ごとにグループを作り、その中で（　　）に書いたことを話し合う
	5．全体交流	⑨　資料ごとのグループで発表する。
まとめ	6．まとめ	資料１　この話し合いを（芋こじ）という。芋こじは心の（せんたく）をしたり、問題をみんなで（そうだん）したりして、もっと良い方法を考えた。 資料2　人々は（仕事）を休み、話し合いに出席した。話し合う（内容）（目的）を知ると、話し合いに出席しなければならないという気持ちになった。 資料3　人間にとって、一番大切なのは(徳)である。消極的の公徳ではなく、成功をめざして（協力）する（積極的）の公徳をするのが良い。
	7．視点の変換	⑩　農場員名札の最初に、皆さんが良く知っている人の名前があります。二宮尊親ですね。芋こじを始めたのは二宮尊親です。
	8．発表	⑪　芋こじは百年以上も前からの話ですが、実は今も尊親の考えは報徳訓として語りつがれています。
広げる	9．自己評価	⑫　いまこそ「ほうとく」に学ぶを配布（資料４） ⑬　この資料を読んで、あなたの経験やこれから頑張っていきたいことを発表して下さいる

○　**評価**　・芋こじに関心をもち、資料を活用して意欲的に調べることができたか
・二宮尊親や報徳訓を身近に感じ、自分なりの考えを発表できたか。

○　授業の反省（授業後の話し合いから）

茂岩小学校四年生１６名の子ども達は、報徳の教えを生き生き楽しそうに学んでいました。林　千登勢先生の巧みな指導技術に負うところは勿論のこと、二宮報徳館にある実物「牛首別農場名札」を教室に持ち込み授業の導入を図り子どもたちの興味を引き付け、学ぶ意欲を引き出したり、むずかしいといわれている報徳の四綱領を子どもの学校生活に具体的におろした資料を使い、やさしくしたことが成功につながったと思われる。

○　資　　料

資料１　芋こじ

この話し合いを「芋こじ」という。「芋こじ」とは、どろのついた芋を洗う時、おけの水の中で芋どうしがぶつかりあってきれいになるという意味。

つまり、話し合いでは意見を本音で言おうということである。本音を言うことで、人と人の本心をぶつかり合わせる。それによって、心のせんたくをすることができる。

次のような話がある。「人がこの世に生きていくことは、海をわたるのと同じ、海をわたることは大変むずかしい。いま海を泳いでわたろうとする人、船で渡ろうとする人がいる。どちらもわたるのは難しい。泳いでわたるには泳ぐ練習が必要。船でわたるには船をこぐ練習が必要。人生も同じ。人生には、多くの問題がまちかまえている。この問題をみんなで相談して、最も良い方法を考えるのだ。

この話し合いを（　　）という。芋こじでは、心の（　　）をしたり、問題を皆で（　　）したりして、もっとも良い方法を考えた。

資料２　話し合いと出席

話し合いは、毎月開かれた。ヨーロッパの国には、安息日という日がある。
人々は安息日にかならず仕事を休み、お寺でおまいりする。その時にお寺の方から大変ためになるお話しを聞く。これと同じように考えて、話し合いに出席しなければならなかった。つぎのような話がある。「この話し合いはとても大切なものだ。この大切さをわからず、話し合いに出ない人がいたとする。農業の仕事が忙しいとき、夏の暑い日には話し合いに行きたくないと思うことがある。しかたのないことかもしれない。

しかし、出席しない人は気持ちがすつきりせず、楽しい気分になることはない。話し合う内容、目的を知ると話し合いに出席しなければという気持ちになる。

人々は（　　）を休み、話し合いに出席下。話し合う（　　）、（　　）を知ると、話し合いに出席しなければならないという気持ちになった。

資料３　知識よりも徳　　～積極的な公徳～

知識とは、目の前のおこつたことを考えたり、昔の出来事を知ったり、これから起きることを予想したりする力。しかし、人間にとって一番大切なのは徳である。すぐれた知識を持っていても、その使い方をまちがえると人にめいわくをかけてしまう。良いことをすすんで行い、悪いことをしないようにすることが徳である。

どんな心正しい人でも、良いこと・悪いことの判断をまちがえると、徳をうしなうことになるのだ。

次のような話がある。「公徳とは、人に対する徳である。簡単に説明すると、人の邪魔をしないこと、人との約束をやぶらないこと、人のために何かをしてあげることである。

人からされていやだ思うことをやり返すのは、消極的の公徳という。やってみると良いことを人にすすめること、人が農作業や生活でよい計画・工夫をしているとき、成功を目指して協力することを積極的の公徳という。

人間にとって、一番たいせつなのは（　　）である。消極的の公徳ではなく、成功を目指して（　　）する（　　）の公徳をするのが良い。

資料４　いまこそ「ほうとく」に学ぶ

（豊頃町教育研究所生涯学習部会案を参考）

言　葉	主　な　言　葉　の　意　味
至　誠	・係りの仕事や児童会活動では、自分の力をせいいっぱい発揮することが大切である。 ・人には親切にする。うそをついたり、だましたりしてはいけない。
勤　労	・自分のことは自分で行い、家族の一員としてお手伝いをすることができる。 ・毎日の小さな努力のつみかさねが大切である。
分　度	・必要以上に物をほしがったり、お金のむだづかいをしたりしない。 ・クラスや学級では、きまりを守って生活しなければならない。
推　譲	・家族やお年寄りには気をつかい、おもいやりの心をもってせつしなければならない。 ・友達の良さがわかり、友達といっしょに活動することの楽しさがわかる。

資料5　社会科学習をふりかえって

名 前 ［　　］

1．牛首別農場員名札を見て、何か気づくことができましたか。

（　できた　・　できない　）

2．『徳』の意味を調べることができましたか。

（　できた　・　できない　）

3．資料の意味がわかり（　　）に言葉を入れることができましたか。

（　できた　・　できない　）

4．グループで話し合いをしたとき、すすんで意見を言うことができましたか。

（　できた　・　できない　）

5．ほかのグループの発表を聞いて、調べたことの内容がわかりましたか。

（　できた　・　できない　）

6．『推譲』の意味がわかり、あなたの経験やがんばっていきたいと思うことを発表できましたか。

（　できた　・　できない　）

7. 今日の学習の感想を書いてください。

道徳指導資料　①

「道徳　十勝的資料の収集と活用に関する研究」
～十勝開拓の史実の中から～　十勝教育研究所編
1968.12（笠松 担当）

主題名　**これがめざす土地だ**
～牛首別原野をひらく～　二宮尊親

めざす土地の発見

いまから７０年ほど前のことです。
ギラギラと照りつける夏の太陽の下を、せいの高さほどあるあしを踏み分け、小高いおかをのぼっていく５、６人の男たちがいました。流れる汗をふきもせず、いっしんに進むその姿はなにかいような感じさえするのです。

そのとき、なかまの一人が「早くこっちへこい。見つかったぞ、ここだ、ここだ。」と叫びました。

みんなが行ってみると、青々と澄み切った空の下、広々とした土地が遠くまでつづいているのです。

この土地こそ、あとになって二宮尊親という人が興復社という農場の会社をつくり、開拓の鍬をふるった。牛首別原野（今の豊頃町二宮）だったのです。

新しい土地をもとめて

二宮尊親は、なかまの人たちと、新しい開拓の土地を求めて、北海道へやってきたのでした。しかし、その頃には、開拓に来ていた人も多く、適当な土地を探すことは大変な仕事でした。なんどもあきらめようと思うのですが、なかなか決心がつきません。人の話を聞いて、十勝へ行ってみようと思った尊親たちは、この探検に最後の望みをかけました。

えりも岬は、馬に乗ったり歩いたりして、ようやく十勝川の河口（今の豊頃町大津）につきました。そこから十勝川をさかのぼり幕別の近くで土地を探しました。生い茂った草や木をかきわけ、暑い日差しにてらされながらの土地探しは、なかなかうまくゆきません。

そんなようすを見て、案内をしていた人は、ある日のこと、オベリベリ（今の帯広市）で開墾をすすめている晩成社の依田勉三という人に尊親たちを会わせることにしました。先に来ていた勉三に聞けば、何かよい考えがうかぶであろうと思ったからです。しかし、勉三と話し合っても、思うような土地はなく、尊親たちの気持ちは暗くなるばかりでした。

尊親のなやみ

一行はがっかりして、つかれた足を引きづるようにして丸木舟にのり、十勝川をくだりました。日暮れ近くに大津に着きましたが、誰一人口を開くものはいま

なかまのかっとう

せん。しばらくは、じっとすわったまま赤くそまった西の空を見上げているだけでした。

「このままひきかえしてはざんねん …… この広い土地に、作物のできる土地はもうないのだろうか……」と、一人がはきだすように言いました。

「ないものはないんだ！」

「ないはずがない、おまえはあきらめるというのか！」

「そんなことは言っていない。しかたがないと言っているのだ！」

「まて、まて、争っている時ではない。何か良い方法があるはずだ。」

「ひとまず舟をおりて考えよう　」

「しかし、舟をおりてしまっては、あきらめてしまうことと同じではないか！」

なかまたちは、いまにも立ち上がらんばかりに言い合いしました。

尊親はたまらなくなって

「みんなの気持ちは同じだ。しかし、いまこの日暮れに舟を出してはきけんだ。ひとまず舟をおりよう。」となかまをなだめました。

トンカとの出合い

夕ご飯を食べながら、尊親はひとりつぶやきました。

「このままでは国にかえることはできない。どこかよい土地はないのか」さびしそうな尊親の姿を見て、やどの人は、すぐにこのあたりの土地にくわしいアイヌの青年、トンカをつれてきました。

「あなたは、十勝の土地を良く知っているようだが、……」

尊親は力なく聞きました。

「はい、私は子どもの時から十勝の野山を、鹿や熊を追ってあるいています。この近くに牛首別というところがあって、その土地はよくこえています。私が案内してあげましょう。」

トンカは、目を輝かせて話しをしてくれました。思いがけないトンカの返事に尊親の心に明るいひざしがさしたようでした。

そして、つぎの日、一行は目指す土地についたのです。

１８９６年7月２９日のことでした。

尊徳のかいたくに対する熱意が、トンカと尊親をむすびつけたのでしょう。

仕事の出発

それから尊親たちは、農業をする許可をもらい、クマやキツネにおびえながら、木を切り、草をかり、厳しい冬の寒さをのりこえて土地を切り開いていったのです。

素材　○北海道開拓秘録　○ひらけゆく大地　○北海道精神風土記　○豊頃町郷土資料

対象　小学校中学年程度

価値　不撓不屈

参考　二宮尊親はおじいさんの尊徳が日光でしごとをしていたとき、日光の今市で生まれた。父の尊行と共に興国安民法（すべての国民が金持ちになって楽しい生活をしようという考え）の仕事をおしすすめていたが、明治維新によりその仕事が困難になってきた。当時社長（興復社）であった尊親は、事業のゆきづまりの打開のため北海道に渡り開拓事業をすすめることにした。

明治２９年７月尊親一行は、室蘭に上陸し石狩地方にむかうが、鉄道開通前で物資の供給に不便であることからあきらめ、仕方なく十勝平野に入ることを決意したのであった。めざす土地の発見の後、翌３０年３月許可を得て、移民が始められた。

移民にあたって、移住民資格規定にもよるが、厳選されて入植した人には、契約によってかなりの保護が与えられていた。

○　食料、家屋材料及び農具、初年度の種子料、開墾料の支給

○　一戸につき、原野５町歩（耕作地４町歩は、４年以内に墾成すること）

○　報徳金として１反歩につき３年目より２年間は金５０銭、以後１３年間は、金７０銭を納める。等のきまりは他に例がなく事業の成功につながった。

道徳指導資料　②

「道徳　十勝的資料の収集と活用に関する研究」
～十勝開拓の史実の中から～　十勝教育研究所編
1968.12（笠松 担当）

主題名　**芋　こ　じ**

～興復社農場の精神～

芋こじのようす

毎月２０日の午後になると、野良着のままの人たちが、ぞろぞろ集まってくる。

集会場は，土くさい中にも、何かしらなごやかな感じがしている。

ここは、豊頃村、牛首別原野にひらける興復社農場である。

部落の人達が全部集まったところで、集会がはじめられる。

この農場をひらいた二宮尊親が立って、報徳精神について話が始められた。

人々は、じっと話を聞きいっている。しばらくして、尊親の話が終わると、

「うちの豆のそだちが　どうも悪いんだが。」

「草取りには、まいってしまった。」

「あんたのところは、さく物の育ちがいいが、どうしているんだ。」

「 うちの子が、風邪をひいてしまって…… 」
とあちこちから話がはじめられた。
ひとりひとりが、話に耳をかたむけ、うなずき、答えるその姿は、開拓の仕事に対する熱気がひしひしと感じられる。

芋こじの意味

このような話し合いのことを、部落の人達は「いもこじ」といつていた。
「いもこじ」とは、土まみれのいもを、おけにいれてかきまわすと、一つずつ洗わなくても、みなきれいになる。ということで、同じように人々との場合も「いもこじ」によって知識を得て、修養もできるということである。

二宮尊親の開拓

二宮尊親は、開拓の熱にもえ、北海道に渡って来た。そのころ北海道は、まだ開発が進んでいなかったとはいえ、開拓の熱に燃える人達が大勢入り、各地で汗をながしていたのである。尊徳は十勝をその土地とさだめ、苦心の末豊頃町牛首別にその土地を見出したのである。

厳しい条件

夏はガスがかかることが多く、日光がさすのは、一日２～３時間ぐらいのこともめずらしくはなかったし、冬は寒さが厳しく立ち木がこおってわれるほどであった。そうした困難をのりこえ、開拓の仕事を進めるためには、考えねばならない多くの問題があった。

二宮尊親の教え

二宮尊親は、おじいさんの二宮尊徳の教えをひきつぎ、自らも報徳分度論というものを説いて、この困難に立ち向かったのである。「いもこじ」もその一つであった。
このほかにも、みんながまもるべきこととして、自分自身をつくりあげること、よく働き貯え、自分の力に合わせて生活をし、困っている人を助けること、などいくつかのきそくをあげ、規律ある開拓の仕事をめざしたのである。

報徳精神の発展

これらの教えは、この農場のささえであった報徳精神として、農民一人ひとりに多くの影響を与えていったのである。
この協力一致のようすは、他に類をみないほと効果をあげ、部落の発展をささえたのである。

素材　○　報徳記（富田高慶）　○　尊徳生活原理要説～報徳分度論～
対象　中学校
価値　信頼　友情　勤労のよろこび

参考　尊親は、おじいさんの尊徳の仕事をひきつぎ、仕事を進めていた父尊行を手助けしていたが、明治維新の変革で事業が中絶し、北海道開拓の情熱を燃やすにいたる。
明治２９年７月２９日ついにめざす土地をみつけ開墾に着手したのであるが、移民の安定を図るために、移民を厳選するなどきめのこまかい計画を持ってあたった。

移住民一同が協議してきめた組合規約は全文２５条あるが、
・火災、水難、病気、その他の非常の場合には、隣近所協議し弁当持参で，応分の助力をすべし。
・毎月２０日は例会を持ち、午後より休業，参会し諸般の協議および講究をなすべし。
・農事休業日は、祝祭日、移動記念日，探検記念日、二宮神社祭として国旗を掲げ仕事を休む。
・文字あるものは毎年一家の歳入、歳出、耕作反別、収穫調べをすること。
・勝負又は諸興行は一切厳禁する。
など、団結と開拓の意義確認に大きな意味があつた。

また、一致共同して守るべき事項として
一、諸般ノ恩徳二報ユル二我徳行ヲ以ッテスルコト
一、克ク勤二克ク倹ニシ分度ヲ守リ家政ヲ確立スルコト
一、余財ヲ推譲シテ公益ヲ起シ善行ヲ立ツルコト
をあげ、共同団結の維持に努めた。
このように移民といってもただ単に一獲千金を夢見ることなく、その事業の進め方については他に類をみないものがあって、精神的ささえが、この事業の成功をささえたといえよう。
なお、詳しくは精神的なものをさぐろうとすれば、報徳分度論を参照されたい。

③　こんな授業展開してみませんか？

銅像を見ながらの授業　!?・・・古い、古い、辛気臭いなどと言わないで、
十勝の開拓を学ぶには・・・依田勉三にきまってるよ。
そんなことはありません・・・二宮尊親もあるんです。
社会科でも、道徳でも、総合学習でもやってみませんか。
2008.2　笠松

題材名　二つの銅像

まず、学ぶ対象としては小学校「6年生の後半」か「中学生」がいいとおもいます。　なぜなら、歴史で江戸時代を学習し、武士と農民の身分の違いを理解されていればより効果的に学ぶことができるはずだからです。そして、⑤の資料の内容や使い方によって、いろいろ教科の目標、道徳の価値追求を進めることができると思います。

「二宮金治郎像」の見学

①　える夢館まえの「二宮金治郎像」を見学する。

教師　「さあ、この銅像は誰だかしってるかな?」

子供　・「子どもだね　かわいい顔してるよ」
「何か背中にしょってるよ」
・「先生そんなのしってるよ　二宮金治郎だよ」
・「荷物を背負って、本をよんでるね」
・「豊頃小学校のと同じだよ」

「二宮尊徳像」の見学

②　次に、役場前の「尊徳回村像」を見学する。

教師　「さて、今度は大人の銅像だね」
「身長　185センチ　体重95キロもあるんだよ」

子供　・「ずいぶん大きいね　先生より大きいね」
・「チョンマゲがあって、おすもうさんみたいだね」
・「せんせい　刀をさしているから　武士だね」
・「わらじをはいてるから　旅をしてるのかな」

教師　「この銅像は　何と言う人かな」

子供　「二宮尊徳つて書いてあるよ」

二つの銅像の比較

③　ここで、二つの銅像を対比し、疑問を持たせる。

教師　「ところで、二つの銅像を見たが、同じ人なのだろうかな?」

子供　・「二宮は同じだけど、金治郎と尊徳だから違う人だよ」
・「名前を変えたのかもしれないね」
・「ぼくはちがうと思う、だって金治郎は農民の子だよ」
・「尊徳は　刀をさして武士の格好をしているよ」
・「江戸時代の勉強をしたけど、農民は武士にはなれないよ」

教師　「みんなの疑問はもつともだね。でも、農民の子金治郎は仕事ぶりを認められ、武士になったんだよ」

尊徳の表情から授業の目標へ

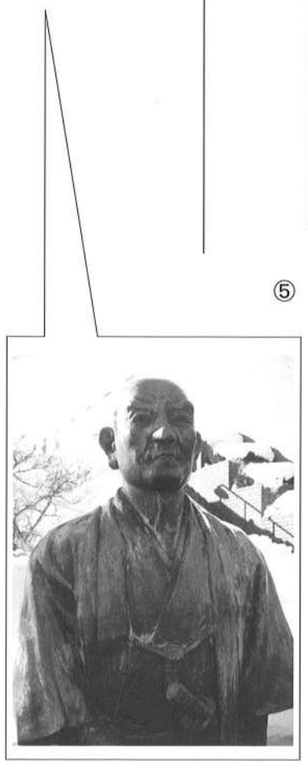
④　尊徳の顔の表情を見て考える。

教師　「こんどは、二宮尊徳さんの顔の表情を見て、感じたことを発表して下さい」

子供　・「おこつているような　厳しい顔をしているよ」
・「額にしわをよせて　困っているようだよ」
・「何か悩みがあるような表情だよ」

教師　「この時の尊徳は、はじめて武士になり、桜町(栃木県二宮町）で仕事をした時だよ」

子供　「武士になって　何をしたんだろうね」
「尊徳は武士になったら　えばったのかな」
「尊徳さんは　武士になってうまく仕事ができたのかな」



⑤　資料の提示　（下に示したものはあくまでも参考に）

一章　Q51「幼少の金治郎」　Q２「金治郎の勉強は」
Q５「桜町のしごとは」Q10「一円融合とは」
Q11「芋こじとは」　Q11「晩年の尊徳のしごとは」

二章　Q７「農民わ救った秋ナスの味」
Q８「なぜ鶏鳴回村像というか」

三章　Q３．４．５「報徳のおしえとは」

四章　Q９「尊親はどのように土地をみつけたか」

⑥　授業のねらいに迫る（以下 略）

七. 「二宮尊徳ゆかりの地」を訪ねて

東京や伊豆地方では桜が満開というニュース・・・３月３１日、三年間の豊頃町での仕事を終え、家内と共にさっそく桜の北上に合わせ、尊徳ゆかりの「誕生から終焉の地」を巡る旅に出た。

４月２日「尊徳誕生の地～小田原」

１０時３０分、畑地にまだ残雪の残る帯広空港を後に、羽田にむけてに旅立つ。羽田から京急急行で品川駅へ、品川から何年も乗っていない新幹線に乗車、神奈川の南の端小田原には１３時４０分に到着する。

早速、二宮尊徳誕生の地栢山に向かうべく、小田急線に乗り換え栢山駅で下車、田舎道を尋ねながら「尊徳記念館」にたどり着く。

①　尊徳記念館

鉄筋コンクリート３階建（昭和６３年竣工、1階は常設展示室、２階は５０人収容の宿泊施設、３階は２００人収容できる研修室）大きくて立派な建物であった。入館料１人２００円を払い入館、北海道から来たからと、親切にも事務書に荷物をあずかって下さり、説明役のボランティアの方をつけてくださった。尊徳の少年時代、青年時代、桜町や小田原の村づくり等、コーナーごとにグラフィックパネルやろう人形が配置され、アニメーション映画（レーザービジョン）等で青少年からお年寄りまで理解できるように工夫した展示がされていた。

②　二宮尊徳生家

記念館の向かいには「二宮尊徳生家」があり見学することができた。

木造、萱葺きの屋根のどつしりとした風格の屋敷であった。土間や板の間、囲炉り等当時をそのまま再現したものであったが、百五十年前の建物にしては、家構えか

小田原市報徳記念館

らしても江戸時代の中農と言われていたが、誠に立派なものである。萱葺きの屋根や板塀は何年かごとに修復されているが、中央の際立つて太い黒光りのした数本の立派な柱と梁は、当時のものがそのまま使われているとのことであった。

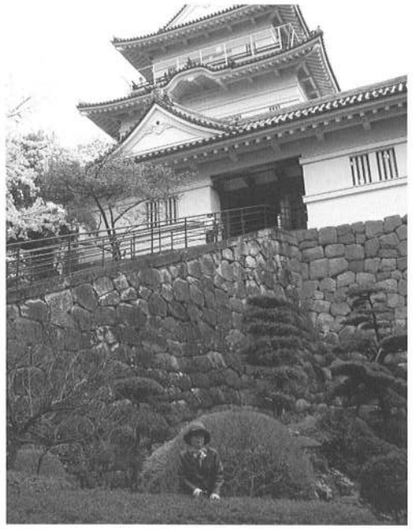
閉館の時間５時が近づいた。残念ながら金次郎の人生を変えた酒匂川は少し離れているので見学はあきらめ、捨て苗の逸話から「積少為大」の言葉を生み出した場所を見学した。その跡地は、現在「小田原市立報徳小学校学習田」として農業体験学習の場として使われ、報徳の教えを体験を通して受け継ごうとしている。西日も暗くなりかけたのでボランティアの方に丁重にお礼を言い記念館を後にする。

二宮金治郎の生まれた家

今にも雨がふりそうな中、登山電車とケーブルカーを乗り継ぎ、ようやく今日の宿泊地「強羅温泉けやき荘」に到着する。

４月３日　「小田原城とその周辺」

①　小田原城



翌日も北海道の天候を持ちこんだような寒い曇天、小田原城を訪ねた。小田原城は江戸末期の天守閣を再現したもので小田原のシンボル。小田原城に関する歴史資料や武具・刀剣を展示、晴れた日には４階の展望室から房総半島や伊豆大島を一望できる。

私は、この天守閣に上り、当時の二宮尊徳の行いを認め農民であった金次郎を武士に登用した藩主大久保忠真公がいたこと、また、栢山から小田原の城下町（武家屋敷）に薪を背負って売り歩いた少年金次郎に思いをはせながら見学する。いま、小田原城の本丸と二の丸の一部を公園として開放、園内には動物園や遊園地もあり、丁度桜の花が満開ということもあり多くの市民の憩いの場ともなっている。

４月４日　「伊豆半島１周のドライブ」

前日、小田原市でレンタカーを借り、熱海・伊東下田（開港記念館、白浜ホテル伊豆急泊）堂ヶ島、伊豆長岡（小松屋八の坊泊）、伊豆半島を１周する。

今回の旅行は、私が豊頃町の仕事を終えた機会に尊徳さんのゆかりの地を尋ねながら、家内サービス（旅行）を兼ねるという欲張った計画でもあった。

ただし、尊徳さんを全く知らない家内にしては、若干苦痛を伴うお付き合いであったことは確かである。

４月５日　「福島県相馬」

今日は快晴、三島駅でレンタカーを返し、東京に向かって新幹線に乗った。久しぶりに富士山が美しい姿を見せてくれた。東京からまた東北新幹線に乗り換え福島に向かった。予定どうり１３：４６分に福島に到着、半端な寒さではなかったのでイトーヨーカドーでセーターを買って着た。

また、レンタカーを借りる手続きをし相馬に向かったが、霊山という峠越えに手間取り相馬には４時近くになってしまった。さっそく、相馬市役所４階の教育委員会を訪問する。豊頃町教育委員会の高井補佐が連絡をしてくれていたので、生涯学習課課長の荒　政明さんが対応してくださった。荒課長はこの４月に変ったばかり、係長さんが現場の説明についてくださりご案内をいただいた。

①　最初に案内されたのは、市役所の近くの尊徳公園にある「二宮尊徳回村像」である。豊頃役場前に立っている像と全く同じ物で親しみを覚えた。「報徳訓の原文」「相馬仕法」を石版に刻み、「なぜ報徳仕法を相馬にとりいれたか」、「今こそ町づくりや人づくりに生かすべき」であることを市民に説いているものであった。

②　二宮尊徳坐像と「相馬の御仕法」について

相馬仕法は相馬中村藩に生きる光と力を与えたことが書かれていた。天明、天保のききんで打ちひしがれた領内（田畑荒廃、財政破綻、人口減少～元禄１５年の９万人から安永５年には三分の一の３万２千人に減少）を当時の藩主相馬益胤（ますたね）とその子充胤（みちたね）は自ら六万石の暮らしを一万石にする「文化の厳法」をもって草野正辰（まさとき）、池田胤直（たねなお）の家老とともに相馬の復興のために努力

する。そこに尊徳の高弟である富田高慶、斉藤高行 僧　慈隆らが加わり協力し合って相馬仕法が成功したことが書かれていた。

③　二宮尊徳と僧　慈隆の墓

相馬市西山の小高い山頂に、愛宕金蔵院跡があり、そこには尊徳と慈隆の墓が並んで立てられている。慈隆は相馬充胤に招かれ、二宮仕法に深い理解を示し、境内に塾を開き藩内外の弟子の教育にあたった。

二宮尊徳と僧 慈隆の墓

④　相馬藩の城跡

残るものは広い堀とごろごろとした石段ぐらいのものであった。時間がなくてそれ以上に何があるかわからない。

福島県相馬は東北地方、桜のつぼみがようやく色づいてきており、相馬市のお堀周辺の桜も満開とは異なる美しさと情緒を感じさせていた。

4月6日　「栃木県二宮町」～尊徳の武士となって活躍した時期

今日は旅に出て５日目、レンタカーコースの予定を一部変更して、農民だった尊徳が家も土地も全て売り払い武士（地方公務員）になり赴任した地、桜町領（現在の栃木県二宮町）を訪問することにした。二宮町は栃木県の最南端の小さな町、今も報徳の教えを町づくりの中核にすえ、「いちご栽培」でも有名である。

①　二宮町役場

まず、二宮町の役場を訪問（先に益子町の益子焼きの見学をしたり、二宮町役場を探してすっかり遅れる）したのが午後３時３０分ごろであった。立派な時計台のある近代的な美しい建物であった。入ってすぐ広いロビーがあり、そこには二宮尊徳の立像と二宮町民憲章が掲げてありそこで記念撮影をする。受け付けで北海道の豊頃町からきたこと、名前と目的を告げると、全くの飛びこみの訪問者にもかかわらず大変歓迎をしてくださった。

見学場所が町から離れているので急いで行った方が良いと地図を書いてださり、閉館するのを待つよう電話をしてくださった。

②　二宮尊徳資料館

地図をみながらで道路を間違えたりして、二宮尊徳資料館（平成１２年完成）に到着したのは閉館前３０分前であったが、快く対応してくださった。資料館は尊徳の桜町における事業をどのように着手したか、桜町での尊徳のエピソード等わかりやすい絵図で説明がされて小中学生でもわかるようになっていた。

③　国指定史跡「桜町陣屋跡」

ここは尊徳が武士になって初めて桜町仕法を実施した事務所兼住宅であった。萱葺きの立派な建物で井戸もあった。陣屋のすぐ隣にある二宮神社にお参りをし、急いで引き揚げることにした。５時３０分になったので、見学地に別れを告げ資料館にきていた役場職員の方に、今日の宿泊地日光鬼怒川に向かう道路の途中まで先導をしていただいた。

桜 町 陣 屋 跡

4月7日 「尊徳終焉の地～日光市今市を訪ねて」

ホテルの前を流れる鬼怒川の流れで目をさます。・・・前日、道に迷ってホテルにチェックインしたのが夜の８時近く、漸くの思いでホテルに到着したので、すっかり疲れが残ってしまった。・・・「年をとって知らない道をレンタカーなどで旅をするなど無茶なこと」と家内に散々愚痴を言われたのは昨夜のことである。

今日は、どうしょうか！・・・そこで思い出したのが、豊頃町二宮の若原さんから紹介された今市一円会の佐藤治由さんの電話番号であった。あまり迷惑をかけたくはなかったのだが、昨夜の道に迷ったことを思い出すとお聞きするしかないと思った。出発前に一度今市の佐藤さんに電話したがお留守だった。今日はすんなり繋がった。

「尊徳さんの終焉の地今市の史跡を見学したい」と道を尋ねると、「なかなかわかりづらいので案内してあげましょう」と待ち合わせの場所を分り易く教えてくださった。

① 尊徳の墓石と今市報徳二宮神社

安政３年（１８５６）、二宮尊徳は「予を葬るに分をこゆることなかれ。墓石を立つることなかれ・・・」と遺言して７０歳の生涯を終え如来寺に葬られた。

その後、尊徳の遺徳を敬慕する門人達の間に墓碑建設の気運が高まり、未亡人歌子の許可を得て三周忌に間に合うよう墓碑が建立された。

今市報徳二宮神社

以下、墓碑や神社建立の経緯は次の通り。

- ○ 明治１４年（１８８１）尊徳没後２７回忌法要の席上、かっての門人達だけでなく仕法で恩恵を受けた村々の人々から謝恩会設立を提案する。
- ○ 明治１９年（１８８６）、今市町の有志が二宮神社の建設を決議する。
- ○ 明治２４年（１８９１）、芳賀郡物部村桜町に二宮神社創立の願書が提出される。
- ○ 明治２５年（１８９２）、小田原報徳社が小田原報徳二宮神社創建の願書を提出する。今市の有志が今市報徳二宮神社創建を呼び翔け願書を提出する。
- ○ 明治２６年（１８９３）尊徳の墓地と如来寺境内の一部を神社敷地に刳り入れることを承認。
- ○ 明治２７年（１８９４）小田原報徳二宮神社創建鎮座。
- ○ 明治３０,年（１８９７）今市報徳二宮神社が創建鎮座、孫の二宮尊親は北海道牛首別原野の開拓から、今市報徳二宮神社創建鎮座祭に臨席し、祖父尊徳の霊前で祭文を朗読する。
- ○ 明治３１年（１８９８）二宮尊行、富田高慶が今市報徳二宮神社に合祀。

「神社創建」になぜ時間を要したか

① 江戸から明治へと大きな時代の変わり目にあったこと、尊徳の遺志をどう尊重すべきか、尊徳の遺徳と民衆の敬慕

② 遺徳をしのぶ順序（誕生地の小田原か、終焉の地の今市か、更には、栃木の桜町か（一つの県に一つの神社）

③ 神社建設の財政負担をどうするか。

④ 恩恵を受けた農民は創建に熱心、武士階級は日光東照宮（日光神領）があるプライドから熱心でなかった。

② 日光神領廻村と尊徳坐像

今市の二宮尊徳像はどれも坐像である。尊徳が幕府からの日光神領復興仕法を開始の下命を受けたのは彼が６６歳、高齢に加えて病におかされての廻村であった。坐像は当然のことであろう。

幕府は日光の荒れた土地御神領を現地を見ないで、尊徳にすぐに開発する計画を出すよう命令した。

山岳や丘陵の多い日光の村々を
猛暑のなか徒歩で巡回した

尊徳は現地を実際に見て調査しなければできないと断った。しかし、幕府の命令は拒否することはできず、やむなく尊徳は自分が高齢で病身であることを考え、自分の手を離れても、だれでも実施でき、どの土地でもあてはまる仕法のひな形づくりを長男弥太郎（尊行）と２０人を越える門人の協力で仕法のひな形を２年３カ月をかけ完成させた。

③ 日光今市五か村用水（二宮堀）

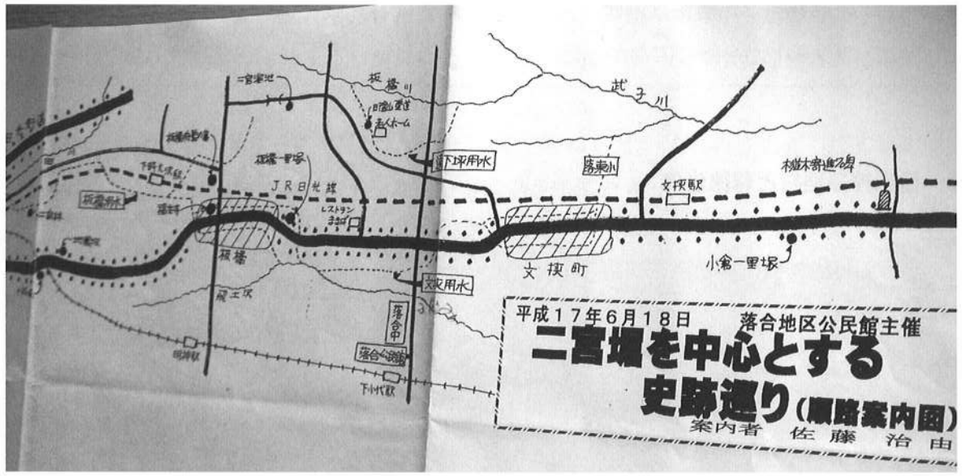
いまいち一円会佐藤由治さんが最も力をこめて説明してくださったのはこの二宮堀（五カ村用水）である。

○ 二宮堀水神碑

東武日光駅から徒歩３分、霜降大橋近くの大谷川から取水、取水口から３００メートル下流地点に分水堰が設けられ、五カ村（七里・野口・和泉・平ヶ崎千本木）用水組合が平成１６年に造成した二宮尊徳の坐像がある。

○　**五か村用水**

日光の大谷川を水源とする用水路で尊徳先生の設計によってできたものである。最初は、和泉村，平ゲ崎、千本木の三ヶ村民の労力によって開かれ、後に七里、野口の両村が加わって五カ村用水となった。用水路は延長４７８間、作業にかかわった人１８００人余、工費４０両余りを費やし嘉永７年に竣工したもの。水路完成により、１６０町歩が美田と化し１５０余戸の農家の復興に寄与することができた。今日尚その恩恵を受けているので組合員一同がその遺影を偲び銅像を設立したのである。

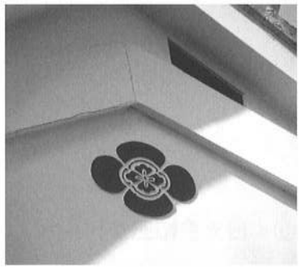


④　**報徳支法役所書庫（有形文化財）**

尊徳の偉業の集大成とも言うべき日光仕法（収蔵された１５年間にわたる仕法記録一万巻～尊徳なき後に何時でも、何処でも手本にできる仕法書）が保管されている蔵である。現在の蔵は、木造石屋根石張二階建で、昭和４０年尊徳没百周年を記念して現在の報徳今市振興会館敷地内に完成した防火施設である。

戊辰戦争の時、福島県相馬市に避難しその後転々と移動したが、百年祭を機にここに復元した。壁の紋章は二宮家のうめである。

紋章



報徳仕法役所書庫

⑤　**今市報徳振興会館**

二宮尊徳没後百年の記念事業として、昭和３０年に報徳今市振興会館が開設されました。それは今市市民が尊徳・尊行両先生の偉業を

正しくより深く理解して、報徳の市民生活、報徳のまちづくりができるよう、報徳の思想と運動を力強くすすめていくためであった。今市小代、加藤武男氏から寄贈されたもので、当館には、尊徳・尊行の業績と報徳思想を理解するための貴重な資料が数多く展示されている。

４月８日　さくらの開花が待たれる帯広へ

前日、日光市今市の佐藤治由さんと別れ、東京プリンスホテルに一泊し、翌日帯広に無事帰ってきた。帯広は前日雪が降ったとみえ、まだ空港滑走路には雪が残り、桜の木々も堅い蕾のままであった。

帰宅後、早速御世話になった相馬市の教育委員会、日光市の「いまいち一円会　佐藤さん」に礼状と六花亭のお菓子を送らせていただいた。

佐藤治由さんからは、その後毎月発行している、報徳道研修の通信「いまいち一円会」や、報徳研究の資料を送っていただいている。電話でもお話させていただいてわかったことであるが、佐藤さんは３０年教員をされ、その後指導主事や校長を１０年され、後に教育長を勤められ、今年８０歳になられても、報徳思想を仲間とともに研究し、社会に役立てようと活動されている素晴らしい方であることがわかった。

まとめ　尊徳ゆかりの地を尋ねてよかったことは

①　この旅を通じて、生涯を至誠の心で生き抜いた金治郎の偉大さを改めて実感することができた。

②　各地で尊徳に学び、町づくり、人づくりに生かそうとする人々に出合い、資料を得ることができ収穫であった。

③　最初いやがっていた家内が、尊徳の生き方に引かれ、それなりに理解する一人となった。今後私が報徳サミットに参加すると言っても反対はしないであろう。

④　いまや、報徳の教えは日本のみでなく中国や外国の人々が関心を寄せ、世界に広がりつつあることを知った。

⑤　史跡を尋ね歩くため、レンタカーを借りて旅行したが、道に迷ったためにカーナビを買うことになった。携帯の次の文明の利器にふれることができた。

む す び に

豊頃町の未来をつくる若者たち、特に小・中学校の子ども達の「報徳を学ぶきっかけ」にしていただけたら幸いです。また、報徳のおしえは豊頃町だけの問題ではなく、日本や世界に通ずる「これからの生き方の課題」であります。十勝管内の先生方にも、ぜひ「関心を持つきっかけ」に、そして「指導するきっかけづくり」にしていただければと思います。

本書編纂にかかわっては、第一から三章までは、下記の参考文献を豊頃町図書館の「二宮尊徳書籍コーナー」で閲覧させていただきました。第四章「二宮尊親の北海道開拓」では、郷土史研究家　君　尹彦氏の資料「報徳の里」を使わせていただきました。六章「生涯学習部会研究のまとめ」では、豊頃町の研究協力員のみなさんのご協力をいただきました。豊頃小の榎波先生、茂岩小学校の林先生の授業案を掲載させていただきましたが、両方ともすばらしい授業が展開されました。授業の記録が残っていなかったのが誠に残念です。

また、退職後に尊徳ゆかりの地を訪問した時に「資料館」等で手に入れた資料等を活用させていただきました。

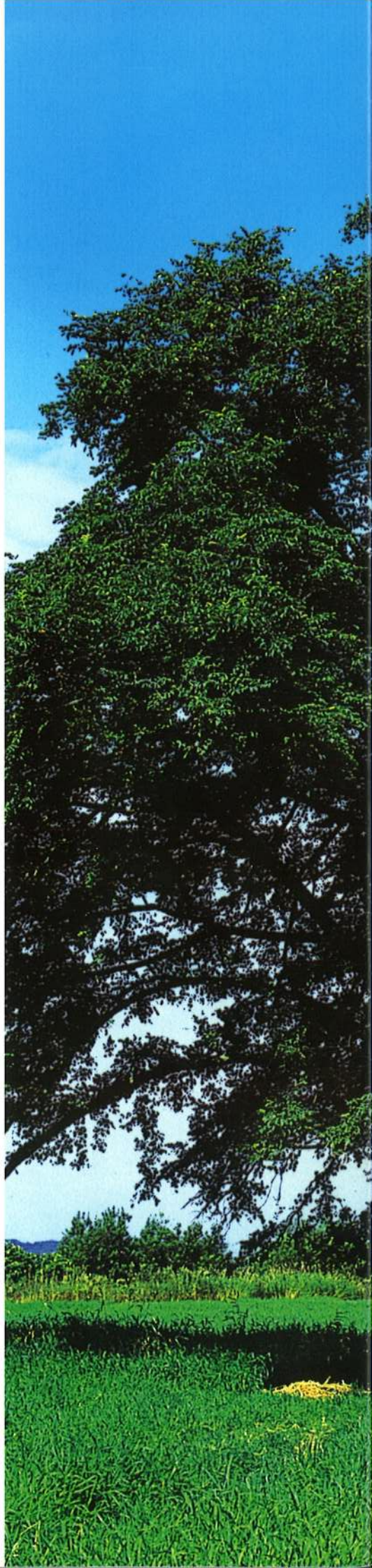
参考文献

○ 二宮尊徳の人間的研究（広池学園出版）　○ 尊　　徳　上・下（隋想舎）
○ 定本　報徳読本　（緑陰書房）　○ 今こそ「報徳」（豊頃町教育委員会編）
○ 二宮尊親の北海道開拓（渡辺利春著　龍渓書舎）　○ 報徳サミット報告集
○ 相馬報徳読本（相馬市教育委員会）　○ ゼロ成長の富国論（文芸春秋社）
○ いまいち一円会誌　今市報徳振興会館参観資料（報徳道研修いまいち一円会）
○ 二宮金治郎物語（小田原市教育委員会）

「 報徳のおしえ Q＆A 」

発　　行　平成２０年３月
発行責任者　豊頃町小・中学校連携教育推進会議
〒089-5312　中川郡豊頃町茂岩本町 166（豊頃町教育委員会内）
TEL　０１５－５７９－５８０１

著　　者　笠　松　信　一
略　　歴　・昭和１６年８月　芽室町生まれ
・平成１４年３月　幕別町立幕別小学校長定年退職
・平成１６年３月　幕別町立わかば幼稚園長退任
・平成１９年３月　豊頃町生涯学習アドバイザー退任



豊頃町小・中学校連携教育推進会議